

春泥

久保田万太郎

青空文庫

向島

一

……渡しをあがつたところで田代は二人づれの若い女に呼びとめられた。——小倉と三浦とはかまわずさきへ言問ことといのほうへあるいた。

「何だ、あれ？」

すぐにあとから追ツついた田代に小倉はいった。

「あれは、君……」いいかけて田代は「慶ちゃん、君は知ってるだろう？」それがくせの頤あごをなでながらあるいている三浦のほうへ眼を向けた。

「チビ三郎の内儀かみさんじゃアねえか。」

ずけりと膠にべもなく三浦はこたえた。

「チビ三郎？」

小倉はその、体に合せて小さな眼を眼鏡のかげにすくめるようにした。

「千代三郎さ、あの。」すぐに田代は引取って「成駒屋んこの、それ……」

「あゝ、あの女おんながた形の。——寸すんのちよい短い……？」

「だからチビ三郎よ。」

ずけりとまた三浦はいった。

「どっちだ、しかし？」小倉はその汐しお先さきに乗らず「ハイカラのほうか、銀杏返しぎんぎょがしのほうか？」

「ハイカラのほうだ。」

「それなら大したこたアねえ。」

「ねえとも、あんな。」三浦は吐出するように「だのに、あの。——何だ、あのふやけたざまア……」

「なぜ？」

「そうじゃアねえか、なぜって？——多寡たかが役者のかゝアじゃアねえか。」

「多寡が何だって？」

「役者のよ。」

「と、われくは？——そういうわれくは……？」

「だからよ、おなじ流れの身だからそういうんだ。——ことさら安くするんじやアねえが、そうならそうのように、役者のかゝアならかゝアらしく、まるで知らねえ面^{つら}じやアねえんだ、おや今日^{こんち}は、とか、まアお揃いでどちらへ、とか、うそにもその位なことをいうのが至^{いた}当^{あた}じやアねえか。——それを乙う片づけの、いゝ間のふりに、要ちゃんじやアない、そこへ行くの……？」

「だって、それは……」

「それも堅気の上りとか何とかいうなら仕方がねえ、手めえだって芸^{げい}妓^{いしや}をしているんじやアねえか。——うそにも愛嬌^{しょうばい}稼^{がい}業^{ぎやう}をしているんじやアねえか。」

「……………」

田代は口をつぐんだ。

「どだい氣に入らねえ。——あんまりものを知らなすぎる……」

三浦は一人でそう毒を……やがてそれが「三浦幸兵衛」と仲間うちにいわれる所以の……ながした。小倉は、どこを風がふくといったかたちに、冬がれや、冬枯の……しきりに一人、句をあんじながらあるいた。

いたずらにだゞッ広くひろがった向島の土手。――桜といったら川のほうにだけ、それも若木といえど聞えがいゝ、細い、脂やにツこい、みじめな、いえど氣まじな枯枝のようなものゝしるしばかり植わった向島の土手。――折からの深く曇った空の下に、むかしながらの常夜燈の、道のどまん中にしら／＼と打捨うちちやられたように立っているのが、水の上の鈍く光るのと一しよに、あたりのさまを一層霜げたものにみせた。――玉の井ゆき吾妻橋ゆきの青い乗合自動車がそういつても間断なくその道のうえを行交ゆきかった……

二

「おや？」

急に田代は立留った。

「何だ？」

その頓とんきよ驚な声におどろいてとも／＼三浦も立留った。

「牛うしの御前ごぜんがなくなつた。」

「牛の御前が？」

田代と一しよに三浦も土手の下をみた。——なるほど、そこには注連^{しめ}を張った大きな銀杏のたくましく聳^{そそ}り立っているばかり、鳥居も、玉垣も、社殿も……牛島神社の影もかたちもが存しなかった。——乾いた地膚の、空坊主^{からぼうず}に、さむ／＼とたゞひろがっているばかりだった……

「何てこった。」

三浦はいった。——舌打するように。——半ば自分にいうように……

「どうしたんだろう、しかし。——どツかへ引越したんだろうか？」

その尾について田代はいった。

「そうには違え^{ちげ}ねえ。——いくら何だって土地の氏神の消えてなくなるわけはねえだろうから。」

「焼けたんだろうね、こゝ？」

「いつ？」

「いゝえ、震災のときに。」

「大焼けのこん／＼ちきだ。——一めん、こゝいら、火の海になったんだ。」

「水のそばのくせにどうしてだろう？」

「その水が燃えたんだ。——たのみにおもうその水まで燃えてながれたんだ。——だから助かろうとして川ん中へ飛込んだ奴がみんな逆に命をおとしたんだ。」

「だけど、それは……？」

「みねえ奴には分らねえ。」ついと三浦は突ツぱなして「とてもあとからおもい及べるこつちやアねえ。」

「そうかなア。」

渡しでいま越して来た川の上をいまさらのように田代はながめた。——どんより一いろに、冷めたく塗りつぶされた水のうえに浮いたいくつもの船。——浮世はなれた感じにぼんやり浮いているそれらのなかを縫つていそがしく白い波を蹴立てる蒸汽。——それは、田代の、いまのようにまだ役者にならない時分、しょうでんちよう聖天町の油屋の次男坊だったころ毎日のようにながめた光景けしきだった。——それがそもぐの身をもち崩しはじめの、近所では眼に立つ、店の隙をみては渡しをわたり、わざぐ須崎町まで清元の稽古にかよった。

——間もなくその師匠のもらい娘を連れて駆落をした。——いまからそれが十年まえのことでだから田代の十九のときである……

「げんざい吾妻が死んでいる……」

ふいと小倉がうしろをふり返っていった。

「えゝ？」

田代は狼狽^{あわ}てゝ小倉のほうへ眼をうつした。

「いゝえよ、吾妻はこゝで死んだんだ。」小倉はしみ／＼した挙^{とり}止^{なし}で「火に追われて小梅からこゝへ逃げたんだ。——土手へさえ出ればいゝと思ったのがあの男の運^{つぎ}の尽^{つき}だつたんだ。」

「あの人が。——あの人が、しかし……」田代はいった。「どうしてそんな死に方を。——大阪で聞いてあたしアびっくりした。——みんな、いゝえ、はじめに聞いたときには誰もほんとうにしなかった。」

「そうだろう、それは。」

「それにあの人。……といえば麻布の狸^{まみ}穴^{あな}にいるものとばかり此^こ方^ちは思っている。——麻布にいるものがそんな目に逢うわけではない。——いゝ加減なことをいうにもほどがある、その時分、ほんとのことのそろゝもう分つて来はじめた時分だから、みんな楽屋でそういつてうわさした。」

三

「そうだ、それは。」小倉はうなづくように「これが吾妻でなくって三浦とでもいうなら、たとえそれは麻布が四谷に住んでいたにしろ、そうかい、やられたかい、あの男? ——

どうで満足に畳の上で死ねる奴とは思わなかったが矢つ張そうだったかい? —— 因縁と

いう奴は矢つ張……」

「戯談じようたんだろう。」

三浦はわざと不機嫌にいった。

「いえば、しかし、そんなもんだ。」小倉はいつそ真がおで「吾妻のようなあんな善人があんな終りをしようとは誰しも思わない。——そこへ行くと君なんざア、筋はいう、にくまれ口はきく、嫌がらせはいう。——誰をつかまえてもロクなことはいわねえ。——だからそこは人情で、三浦がこれくだそうだ、向島で可哀そうに焼死んだそうだ。……といったって誰もかばい手はない、ざまアみる、いゝ気味きびだ、みんなそれも心がらだ……」

「だから、人間、平生ふだんが大切だいじだというんだ。」

それに乗って田代もいった。

「何をいやがる。」三浦は逆に「俺にいわせれば吾妻こそ心がらだ。——彼奴こそ心がらでそんなことになったんだ。」

「すぐだ、それ。」田代はすかさず「どうして心がらだ？——どうしてあの人心がらだ？」

「音無おとなしく、彼奴、麻布の狸穴に引つ込んでればよかったんだ。——何もこんな小梅三さんが界へ這出して来るこたアなかったんだ。——こんなところへこのく、這出して来たりやこそ畢ひつきよう 竟 そんなことにもなったんだ。」

「だって、それは。——仕方がないじゃアないか、それは。」

「なぜ仕方がない？」

「だってそうじゃアないか？——毎日浅草へ通うのに……公園の芝居へ通うのにとても麻布からじゃア大へんだというんで此方こつちへ越して来たというんじゃアないか？」

「よく知ってるな？」

「聞いたさ。——あとですつかり聞いたから知っているさ。」

「じゃア、吾妻が、どうしてそんな公園の芝居へ……それも喜劇の一座へなんか行くようになったかそれも知ってるだろう？」

「それは知らない。」

「何だ、知らねえのか、それを？」

「そんなことまでは知らないさ。」

「金になるからよ。」

「殴るぜ、ほんとに。」

田代はいきなり立留って大きな声を出した。

「なぜ？」

三浦はわざとそうしました。

「素人^{しろうと}じゃアないんだよ、素人じゃア。」

「誰が？」

「あたしがさ。」

「あたりめえじゃアねえか。——いわなくったってそんな分ってるじゃアねえか。——どんなふみ倒しの屑屋にみせたって堅気^{かたぎ}とはみやアしねえ。」

「そんならそうのように。——そうのようにすこしは扱ってもらおう。」

「どうすればいいんだ？」

「公園に出れば金になる位、このごろじゃア、おい、三つ子だって知ってるんだよ。」

「だって知らねえといったじやアねえか？」

「それは相手があの人だからだ。——あゝいう金なんぞにこだわらない吾妻さんだからだ。

——そうでもない、どんなまた蔭にいきさつが……」

「下りるんだ、さア……」

いつかまたさきへ立つてあるいていた小倉がそういつてそのときふり返った。——そのまゝ三人は長命寺のほうへ土手を下りた。

四

門……といつてもしるしばかりの柱を左右に立てたゞけ。——一すじつゞいた敷石の両側に、いろんな恰好をしたいしぶみの、亡骸^{なきがら}のようにすきなくならんでいる以外には、以前の長命寺をしのばせる何ものもそこにみ出されなかった。——名物さくらもちの古い店も、トタン葺^{ふき}の、あからさまな、みる影もないバラックになり果てゝは、つみ上げた番^{ばん}重^{じゆう}と、天井から下がった鈴生^{すずなり}の烏帽子籠^{えぼしかご}とが、わずかにその風流^{みやび}をみせているだけ、

色の褪めた毛氈もうせんのむかしながらに客待ち顔なのがそうなつてはかえつていじらしい……

「酷ひどくなつたなア。」

三人は落語はなしの『おせつ』に出て来るので知つてゐる一九の碑いづくのまえに立つた。——おも

わず歎息するように田代はいつた。

「本堂だつて、みねえ、焼けたツ放しだ。」

突あたりの、ぽつんと空いた地面のほうを小倉は頤で指した。

「あゝ、ほんとに。」田代は再び歎息するように「驚いたなア、しかし……」

「ちツともまだ手がついていねえんだ、こつちのほうは。」

「そうなんだねえ。——銀座なんぞあるいてゐる分にはちツとももう以前もととかわらない気がするけれど……」

「こんな風にしてだん／＼名所もくそもなくなつて来るのよ。」

そばから、三浦は、はつきりそう結論を下すようにいつた。——桜餅やの裏つ側に二三本咲き残つたコスモスも、その下にすくんだ鶏のかげも、柳北の碑の鼻の欠けた柳北の顔も、すべて惨めな、空しい、霜に荒れたそのあたりのけしきだった。

「……まだコスモスの咲き残り。」

小倉は自分にそう口の中でいつてみた。――それへ附ける上五かみを工夫しながら、そのまゝまた、二人のさきへ立つてぼんやりあるきはじめた。

むかしはあつた……に違いない裏門の、しるしばかりの石段をあがつて三人はまた土手へ出た。

「けどしかし、あの人。」ふいとまた田代はいつた。「どうして、しかし、あの人が……？」

「……………」

だまつて三浦は田代のほうをみた。

「吾妻さんさ。――あの人のこつたから、自分からそんな売込むなんてわけはないと思うが……？」

「そんな器用なことの出来る男ならいつまであゝピイ／＼してやアしなかった。」

「といつて買いに。――さきから買いに来るつてことも。……一体あの人のどこに眼をつけたんだろう、さきじやア？」

「ふん？」

三浦はわざと鼻でわらつた。

「芸は勿論、柄^{がら}からいったって、あの人。……どこをどうしたって、あの人、喜劇に向く人じゃアない。——われ／＼『矢の倉』のうちのものゝなかで誰よりも一番そのほうの資格のなかった人だとあたしア思っている。」

「……………」

「それはあれだけの人だ。——あれだけの技倆^{うで}をもった人だ。——だから喜劇へ行けば行ったでまたそれだけのことはしたに違いない。——したには違いなかったろうが……」

五

「そんな役者じゃアねえ。」

と、三浦は、じゃけんにそれを遮^{さへぎ}った。

「そんな役者？」

「そんな潰^{つぶ}しのきく役者じゃアねえ。」

かぶせてまた三浦はいった。

「けど、それは……………」

田代は肯^{うべ}えない顔をした。

「買^{かい}冠^{かぶ}つていたんだ。——お前^{めえ}ばかりじゃアねえ、みんな買冠^{かい}つていたんだ、あの男を。」

——決してあの男、うめえ役者でもなければ上手な役者でもなかったんだ。」

「でも、しかし……」

「喜劇が出来るの出来ないの、そんなところの沙汰^{さた}じゃアねえんだ。——どだい、そんな——はじめツからそんな技^う倆^でのある役者じゃアなかったんだ。」

「そ、それアいけない、それアうそだ。」田代は躍起^{えつき}になって「そんなことをいうツて法はない。」

「あるからいうんだ。」三浦はあくまで冷かに「彼奴^{あいつ}の役者になったそもくから俺ア知^しっているんだ。——まだ、彼奴が、九州の果から果をうろついている時分から俺ア知^してるんだ。——大根^{だいこん}、大根^{だいこん}で、どこでも相手にしなかった役者だ。」

「そんなこといつたつてそれアいけない。——以前はどうでも——以前はどんなだつても『矢の倉』へ来てからは——『矢の倉』の弟子になつて東京にいついてからは……」

「それツていうのが手めえで光つたんじゃアねえ。相手に光らせられたんだ。——無理から相手にそうさせられたんだ。——それには、奴^{やつ}の、これという芸のなかったのが反つて

その役に立つたんだ。」

「それにしたつて。——それにしたつて、しかし……」

「止せよ、みツともねえ。」わらつて小倉は立留つた。「どツちだつていゝじゃアねえか、そんなこと……」

「あんまり、だつて、いくらなんでも僧体にくてなことをいいすぎる。」田代はムキになつて

「あたしア好きだつたんだ。——あの人があたしア好きだつたんだ。」

「俺だつて嫌きらえじゃアなかった。——毒のない好いい人間だつた。」

すぐ、また、三浦はいつた。

「じゃア、なぜ。——そんなら、なぜ？」

「俺もあの男をむかしから知つている。」小倉はしずかに中をとつて「だからしだいはいよく知つている。——が、三浦のようにいつてしまつちやア実も蓋もねえ。」

「が、それに違えねえもの。——あの男の巧いの味があるのといわれたのは畢竟『矢の倉』の大将のつかい方がよかつたからだ、いえば、それア、あの男ばかりじゃアねえ。——菱川だつて西巻だつて古く『矢の倉』のうちにいるものはみんなそうだ。」

「が、そこはあの男は正直だつた。——自分でよく知つていた、それを。——菱川や西巻

のように決して自分をそれほどの役者たア思っていないかった。」

「だから……だからいうんだ、俺は。」三浦は力を入れて「世間じやア、しかし、いっばし手めえで納った役者のようにあの男を思っている。それじやア可哀想だ、あの男が……」

「じやア何だつて公園へ。——何だつて、あんなところへ……？」

田代は突ツかゝるようにまた話をあとへもどした。

六

「買われたんだ。——立派に引ツこ抜かれたんだ。」三浦はしかしケロリとした感じに「が、さきじやア役者として買ったんじやアねえ、おもての人間として買ったんだ。」

「おもての人間として？」

「そうよ。——敵は本能寺、何もあの男がほしいんじやアねえ、もつと外に入用なものがさきにはあつたんだ。」

「……………」

「分らねえか？——さきじやア若宮がほしかったんだ。」

「若宮君が？」

「若宮を引つ張りたいために吾妻を引つ張つたんだ。——若宮にとって吾妻はたった一人の伯父さんだ。——つまりはだから^{おとり}圀。——^{あいつ}彼奴はつまり若宮を引つ張るための圀になつたんだ。」

「だって、それは……」

「何が？」

「いゝえ、若宮君を。——人もあろうにあの人を。——そんな乱暴な……」

「そうよ。乱暴よ。——随分無茶な話よ。——が、それを承知で無理からしかけたいくさだ。」

「それより若宮君を引つ張つて。……いくら若宮君が綺麗だからって、いくらあれだけの人気をもっているからって、あの人を引つ張つてあの人に喜劇の出来ようわけがないじゃないか。」

「誰が若宮をつかまえてそんなことをさせる……」

三浦はわざと声を出してわらつた。

「矢つ張じやア表の人間にか？」

田代は皮肉のつもりでいった。

「新派をやらせるんだ、新派を。」三浦はそれにはこたえず「はじめはあの楽天団らくてんだんの喜劇の間に一幕か二幕挟み、そのうちに汐さきをみて『若宮一座』というものをおッ立てようと先方の肚はらだ。」

「そんなことを、あの、楽天団の奴は？」

「どうして、あの楽天坊主、一筋縄で行く奴じゃアねえ。——肚の底を叩いたらどんなまだ太ふえことをたくらんでるか分ったもんじゃアねえ。」

「が、若宮君。——勿論、若宮君、乗りやアしなかったろうね、そんな話に？」

「気の早え。——まだ、その、吾妻を引っ張ったばかりなんじゃアねえか。」

「だって……」

「ほんの、まだ、小手調べのすんだばかり。——ちようどそこへがらくツと来たもんだ。」

「あ、地震……」

「何もかもそれで市が栄えたのよ。」

「と、吾妻さんは……」

「だから一番馬鹿をみたのは吾妻だ。——わぎく死に、狸穴から這出したようなもんだ。」

「ほんとうに。」

「いゝやな、しかし……」ふいとまた小倉は口を出した。「その代りには、あの男、生れてはじめて二千と三千纏まとつたものを握ったんだ。——門のある家へ入へって急に三人と書生を置いたんだ。——いつそ思い置くことはあるめえ。」

大倉の別荘のまえをすぎていつか三人は中の渡しのまえをあるいていた。——その、入江になつてゐるすこしの部分の、いま汐のあげてゐる最中であらう、たつぷりした感じにふくれた水が、二三本の枯れた雑木の影と、まだ出ない渡しの中の若い女の赤い帯とをさびしくうつしていた。

「あい、御免よ。」

注連しめだの輪飾だのを一ぱいに積んだ車がいそがしく三人の間を通つて行つた。——新しい、すがくしい藁の匂が激しく三人の鼻を撲うつた。

「市か、もう……?」

つぶやくように小倉はいった。——聞えなかったのか、三浦も、田代も、二人は何とも

いわなかった。

七

やがてまた三人は土手を下りた。それが向島へ来たそもゝの目的の、百花園へ行くために、下りてすぐの道を左へ切れた。そこには新開町らしい小さな店がごたゝ軒をならべていた。――小切屋こぎれやのおもてに下ったけばゝしいメリンスのいろが、あたりの沈んだ、引つ立たない空気を無理からあかるくしていた。

「変つたなア、こゝいらも……」しげくと田代はみ廻して「けど、焼けなかったのかしら、こゝは？」

「焼けなかったんだ。」小倉はこたえて「わずかなところでこゝいらは助かったんだ。」
「それにしても一めん田圃だったんだがなア、せんには……」

が、そこをまた右に折れると大きな泥溝……というよりは流れといったほうが似つかわしい……そうした感じの寂しい水がそれ／＼の家の影を浸してながれていた。それがそのあたりの田圃だった時分のさまを可懐なつかしくおもい出させた。――それにはその道の上に

嵩高かさだかにつまれた漬菜つけなのいろ。——二三人の女たちの、洗つてはそばから戸板のうえに載せているその、くつきりした、白い、みずくしい色が一層その鄙びた感じを深くした。

「まだか、おい？」

三浦のそういうのをわらつて小倉は前方まえを指した。

「そこだ。——そこにもうみえている……」

「春夏秋冬花不斷」「東西南北客争来」とした二枚の聯れんを両方の柱にかけた茅葺かやぶきの門を間もなく三人はくぐった。——そこには、まず、入つてすぐの、萩、尾花、葛、女郎花おみなえし、藤袴……そうした立札だけの荒れた土の中にむなしく残つた一廓くるわの境界けいかい。——そのしかえられたばかりの、つやゝかに、青々とした竹のいろがいたずらに冷めたくその間で光っていた。——すべてのその枯々かれがれとした中で、みるかぎり、どこにも人のいるらしい影はなかった。

「しずかだなア。」

田代は感歎するようにいった。

「あたりめえよ。——この寒空にこんなところへ来るのはよッぽどすいきょうな奴かヒマな奴かだ。」

「じゃアわれくは。——どっちだ、われくは？」

「こちらとは両方よ。」

「両方？」

「そうじゃアねえか？——すいきようばかりじゃアねえ、ヒマだから。——ヒマで、もう、体をもちあつかっているんじやアねえか？」

「たまにはいゝんだ。——たまには骨休めに……」

「といつてるうちに頤の干上るのを知らねえな。」

「ふん、戯談じようだんだろう。」

「まア安心しねえ、当分芝居はあかねえから。」

「いゝよ、あかなくつても。」

「可哀かわいや、妹、わりや何にも知らねえな、だ。」

……三人の行くてには、まだ刈られない薄すすきの立枯が、ぼうくとそのまゝわびしく、水のように白く束ねられていた。

その枯薄のあいだを三人は池のふちへ出た。そこには、蒲^{がま}だの藺^いだのが、灰白く、かさ／＼にかたまり合つて枯れていた。――風のない曇つた空をうかべた暗い水がどんよりとそのかげに身じろがなかった。

「何と、また……」感歎するようにまた田代はいつた。「以前^{もと}のまんまだ。――ちツともこゝは変らない。」

「いつ来たんだ、お前^{めえ}？」

「いつ来たつて、もう。――よつぽど以前^{まえ}だ、大阪へ行くまえだから七八年まえだ。」

「七八年？」

「だのに――だのに、ちツとも……」

可^{なづか}懐しそうに田代はあたりをみまわした。

「俺なんざア日露戦争のすぐあとに来たつきりだ。」三浦はわらいもしないで「覚えているだろう、貴公は？　――その時分こゝで『怪談会』のあつたことを？」

「知らねえ。」

小倉はハツキリこたえた。

「そんなわけアねえが？」

「日露戦争の時分じゃア、まだ、こっちは旅をあるいていた。」

「じゃア俺のほうが、さきへ君より東京へ出て来た勘定か？」

「そのはずだ。」

「俺にしたって、しかし、出て来たばかりのときだった。——歌舞伎座で『矢の倉』と、死んだ柳田さんとが合同して『牡丹燈籠』を明治に直した『恋無常』って狂言をやることになった。——で、そのまえに、いまでいえば宣伝だ、景氣づけにこゝで『怪談会』をやったもんだ。——大した、また、それが人気になった奴よ。」

「誰が来たんだ？」

田代が口を出した。

「誰がつてみんな来たのよ。——東京中の新派という新派の役者はみんなあつまった。——それへ持つて来て河岸かしや兜町の客筋、新聞記者や文士、新橋柳橋芳町から手伝れんじゅういに来た連中だけだつてすさまじいものだった。——とにかく『矢の倉』の売出すさかりだったんだ。」

「で、一体どんなことをしたんだ？」

「それがよ、はじめのつもりじゃア皮切りにまず商売人が怪談ばなしを一席やる。——つゞいて誰かそんな話を持合している奴が五六人出てせい／＼怖がらせる。——と、ちょうどそのうちいゝ刻限になるから、一人でこの草の中を通つてあずまやへ行き、そこへめい／＼名前を書いて来るといふ趣向……だったんだ。——たか／＼来て四五十人のつもりだったからそんなことも考えたんだ。——が、いざ当日になると来たのがそのざつと五倍……」

「と、二百……」

「うそをいやア隣の料理屋……といったつていまあるあれじゃアねえ……どの座敷も人で身動きも出来ねえ位^{くれえ}だった。——だから口の悪い奴はいった、これじゃア怪談会でなくつて怪談祭だ。」

「いゝことをいやアがる……」

そういうながら小倉は池に沿つてしずかに足を運んだ。

「そうなたらもう趣向も蜂のあたまもあつたもんじゃアねえ。」三浦も田代もともにそのあとに従いながら「七月はじめの夜の短けえさかりだから、一人ずつその名前を書きに行つた分には夜が明ける。——そこで二人ずつ、三人ずつ——多いのは五人十人隊を組ん

で押しかけるんだから凄いいことも何にもねえ。——こまったのは虫笛だ。——矢つ張それ
もはじめに趣向して、どしこと虫屋から仕入の、あつぱれ草の中へ伏^{ふせぜい}勢を置いたのはい
ゝ、いざとなるとその騒ぎだ、驚いて此奴^{こいつ}が一匹だつて鳴いてみせねえじゃアねえか。」

九

……で、これではいけないと急に狼狽^{あわ}てゝ、とゞ大部屋のもの二三人があたりの闇を幸
い、丈なす草のしげみにかくれてほんとうの虫笛をふくことになった。——そのなかの一
人にえらばれた三浦だつた。

「新参のなさけなさには嫌といえねえ。——そこがいまの大部屋と違うところで、その時
分そんなことをいおうものなら、生意氣な野郎だ、ふざけた畜生^{へえ}だで折角辛苦して入った
一座をたちまちクビだ。——仕方がねえと外の奴らのいゝ機嫌にくらい酔つてる中で、さ
んだらぼツちを持つて俺ア草の中へもぐずりこんだ。」

「何にしたんだ、さんだらぼツちを？」

「尻へしいたのよ。——そのうえにつぐなんで、一晩中、蚊にくわれながらパイ／＼やつ

たのよ。」

「で、うまく行つたのか、それ？」

「うまく行くも行かねえもねえ、大ていの奴は感づいて擦くすくつたそうに笑つて行きやアがる。
——なかで人をくつた奴ア、すました面で、まア芝居のようなこと、だなんぞ聞えよがしにそんなことをいつて行きやアがる。」

「それじゃア引つ込がつかないじゃアないか？」

「でも、はじめのうちは、それも奉公のうちと思つて気が張つていた。——だん／＼夜の更けるにつれて眠くはなる、腹はへる、冷え上つては来る。——こんなことなら北海道で御難をくつてたほうがよっぽどましだった。——俺アそのときしみ／＼／＼そう思った。」

「戯談……」

田代のそう笑いかけるのを、

「じゃアねえ、ほんとうだ。——ほんとうのこつた。」三浦はすぐに押えて「そのときツきりだ。——そのとき来た以来だ。」

草に、木に、水に、夢のようにすぎた二十年の月日の、どんなその破片でもいゝみつきたい、さすがに三浦もそうした寂しいとりなしをみせた。——夏なら木下こしたやみ闇の、枯れ枝

ながら鬱陶しくさし交した下は、溜った落葉の、土の匂も湿^しけて暗かった……

「君は来るのかい、始終？」

小倉のほうを向いて田代はいった。

「始終も来ねえが三月に一度位ずつは来る。」

「何しに来るんだ？——矢つ張発句のほうの……？」

「そうじゃアねえ、ぶらツとたゞ来るんだ。——芝居のたまの休みにこゝへ来てぶらゝするほどいゝ心もちのものはねえ。」

「三浦の釣堀と一対だ。」自分だけ田代はうなずいて「どうだ、そっちは？——行ったかい、もう？」

「行かなくてよ。——二三日つゞけて行つたが面白くねえから止^よした。」

「どうして？」

「いま小倉のいった通り、俺の釣堀だつて芝居のたまの休みに、それこそ一^{いちんち}日か二日の忙しい中を無理をして行くからこそたのしみにもなるんだ。——今度^{こんだ}のようにまるく一月休みの、来月だつて稼げるか稼げねえか分らねえ^{しおざかい}沙^し境^{かい}に立って釣どころの沙汰じゃアねえ。——人情はそうしたもんだ。——なア小倉？」

「そうよ。」

「けど。——けど、それは……」田代はあくまで肯えない顔で「先刻さつきから聞いてればへんなことばかり君たちはいうけれど……どうして……どうして一体そんなことがいえる？」

+

「どうしてそれがお前に分らねえ？」三浦は鸚鵡返しに「こつちにするとそういいてえ奴だ。」

「けど、あたしア、昨日も『矢の倉』へ行っているんだ。——『矢の倉』へ行つて大將に逢っているんだ。——大將ばかりじゃアねえ、ちようどそこへ奥役が来てしばらくあたしア奥役とも話をしたんだ。——だが大將も何ともいわなければ、奥役だつて何ともそんなこたアいわなかつた。」

「いうと思うのか、正直に？」

「それアいうと思う。――げんにあたしア、来月はどこです？　――そういつてあたしア聞いたんだ。」

「何といった、そうしたら？」

「どこになるか小屋はまだ分らない……」

「みねえ、それ。——いゝ証拠じゃアねえか、それが。——そもく幾日だと思ふんだ、今日を？」

「十二月の十五日さ。」

「いつものことにしてみねえ、いつもの？——いまごろまでいつも小屋も決らねえ、狂言も分らねえ。……あつたか、いまゝでに、そんなためしが？」

「それはなかつたさ。」

「つまりは会社と手が切れたんだ。——俺たちア、もう、みんな会社をクビになつたんだ。」

「そ、そんな馬鹿な……」

「打捨^{うちや}るようにいつた田代のそのいいかたのかげにすこしの狼狽^{きろう}のほのめくものがあつた。そういえば——そういえば昨日でも……」

「いゝさ、まア。——どうせいつか分るこつた。」三浦はそれを見透かすように冷かに「お主^{ぬし}のようなところ子はいざというときまで知らねえ面^{めん}でいればいゝんだ。」

「でも。——でも、しかし、そうならそうのように……」

「止せよ、また。」

小倉は眉をひそめるようにした。

「だって、君……」

「はツきりそうとまだ決ったこつちやアねえんだ。」小倉はしずかに宥めるように「たゞそういう気配が俺たちには察しられるんだ。——^{だいだい}橙のかずをよけいくゞって来ているだけに、お前^{めえ}なんぞよりいろんなことがヒョイくとわけもなく俺たちには感じられるんだ。」

——もしやと思うことが大ていその通りになつて俺たちのまえに出て来るんだ。」

「と、じゃア、矢つ張……」

「かりにそうなつたつていゝじやアねえか？——俺たちには『矢の倉』というものがついているんだ。——『矢の倉』というしつかりした師匠がついているんだ。——会社と縁が切れたつて天下に仕打^{しうち}は大ぜいいるんだ。」

「それは——それはそうだけれど……」

「師匠にさえくツついていれば、あの師匠、決してそんな座員を路頭に迷わせるようなことアしねえ。——喰つてく位^{ぐれえ}のかしきはどんなことをしたつてつけてくれる。——いま、

でのようにたゞいう目の出なくなるばかりだ。」

「……………」

そのまゝしばらく話は途切れた。——土橋をわたり……土橋の下には枯れた蓮の太い茎がらちもなく水に潰つていた。……障子の閉つたお成座敷なりざしきのまえを通つて、三人は、散在しているあずまやの、そのなかの一つにやがて腰を下ろした。——そこには競い立った梅の梢……そうした梅の枝々がみえない影をしら／＼とそのあたりに落していた。

「お、鶴がいるぜ、鶴が？」三浦はどんなものでもみつけたように「むかしアいなかった。むかしアあんなものはいなかったぜ。」

素晴らしいながらすぐまたその檻のほうへ立つて行つた。

「どうした、おい、田代？」小倉は女中の運んで来た急須きぶしよの茶をつぎながら「何をそう急にだまつてしまったんだ？」

「急にいま……何だかこう急にいまおちぶれたような……」

「おちぶれた？」

「そんなような、心細い、なさけない氣になつたんだ。」

「馬鹿だなア。」

小倉は憫むようにわらった。

三羽鳥

一

小倉と、三浦と、田代と三人がそうやって向島をほつつきあるいているとき。——もつと、もし、くわしくいうなら、ちょうどその三人が長命寺の境内をまた土手へ出、死んだ吾妻一郎について三浦と田代としきりに議論をしながらあるいているとき、おなじ一座の西巻は……かれらの兄弟子で古い三枚目の西巻金平は一人寂しく矢の倉かしの河岸かしを両国のほうへあるいていた。

その日、西巻は、その前の日田代もそうしたように久しぶりたで師匠のところへ顔を出した。歳暮の挨拶かた／＼その後の模様……というのは、十一月の、会社では地方たへ出す

つもりでいたのを師匠が強情張つて無理にあげさせた本郷の芝居、それがあんまりぞつとした景氣をみせなかつたのである、従つてそこに、師匠と会社との間に、またしても氣不味いものゝ出来たというわさが樂になるすこしまえ樂屋の一部にしきりに行われたのである……をそれとなくさぐつてみたい肚だった。——勿論、そうはいつでも、西巻は会社を信じ師匠を信じていた。よしそんなことがあつたにしろ、そのために、いまさらその位なこのために自分たちの一座がどんなことになる。——そんなことは、たとえば小倉や三浦のいうような、そんな惨めな、縁喜でもないことは毛ほども西巻にはおもいつけなかつた。師匠と会社との間はそんなものじゃアない、自分たちの一座と会社との関係はそんな生優しいものじゃアない、随分、これまで、会社のためになっている師匠なり自分たちの一座なりだ。会社に仕たつてよくそれを知っている。……だからその心配するところは、正月東京で芝居が出来るかどうかということである、十一月無理を通していただけ、ことによると竹篋返しに、大きに春は名古屋へでもやられるかも知れない。春匆々しかし地方は有難くない。——そうした、ぞんきな、一すじな料簡をもつことにおいて西巻はかれより二十幾つも若い田代と相如くものがあった。

というのも畢竟、西巻は、同じ師匠のうちのものになつていても、小倉や三浦、死んだ

吾妻なんぞとはそもくの育ち……役者としてのそもくの育ちが違っていた。そのあるいて来た道がまるで違っていた。小倉でも、三浦でも、吾妻でも、いえはそれらの人たちは、みんな好き勝手に役者になり、さんざ旅を叩いたり、自分大将の一座をもつて押しまわしたり、切迫^{せつぱ}つまつてはタンカラでも稼いだり、それこそありとあらゆる修行をしたあげく、立寄らば大木のかげ、改めていまの師匠のところへいゝ加減ふみしだいた草鞋をぬいだのだったが、そこへ行くと西巻は、その中の誰よりも年をとりながら、そうした浮世の荒い波風をほとんどかれ自身のうえに知らなかった。——二十一の夏、いまの師匠の手ではじめて役者になって以来、三十年にあまる長い月日を、由良のうちの西巻と、影の形にそうように一日も……というとうそになる、二十五六の時分、たった一度、由良が体をわるくして一しよにその芝居をしていた倭^{やまと}の座を急に途中でぬけたとき、そのまゝ西巻は倭につれられて大阪へ下った。——それからそれ半年ばかり九州路をまわつて久々に東京へ帰つて来ると、由良は、横浜で無人^{ぶにん}のさびしい芝居をあけていた。そのあと倭のほうは歌舞伎座で花々しく蓋をあけることになつていたが、西巻はそれを聞くと、片つ方をふり切つてすぐに横浜へ駆けつけた。……だからその半年だけ側にいなかったきり、あとはずっと、どんなことがあつても決してもうその手もとを離れなかった。……

二

ことのついでにいつてしまえば、もと西巻は、日本橋の石町、銀町、伝馬町……その界限を担いであるくぼてふりの肴さかなやだった。お定りの芝居好き、どこの座でもあいて三日目までにみなければ気がすまず、五代目の弁天小僧をみて自分の腕に桜のほりものをする料簡になったり、得意さきでおだてられるまゝ稼業そつちのけに声色こわいろをつかつて聞かせたりしていたうちはまだよかった、それが嵩こしうじて「役者になりたい」になり、伝手つてをもとめて二三人の旧役者のところへ弟子人をたのんだ。一人のところでは肴やというこれまでの稼業がいけないというて断られ、一人のところでは体よくやむやに追返され、一人のところではその不心得を懇々とそういつても親切にさとされた。一時はそれであきらめる気になったものゝ、妄執の雲のほんとうにまだふき晴れなかった証拠には、ある日、朝、いつものように河岸かしへ買出しに行ったとき、たま／＼その問屋の店さきで何ごゝろなく取上げた新聞のある報道がかれのその望みをたちまちまた燃えあがらせた。それは浅草座でやる倭一座の『日清戦争』の狂言に入用いりような臨時雇募集の広告だった。——その

新聞をもらつて腹掛のなかへねじこむとそのまゝ、空の盤はんだい台を引ツかつぎの……というのは、その日酷いシケの日でさかなは何にもなかった。——途中、とある橋の上にかゝつたとき、いきなりかれは、かついでいたその盤まないた台を狙まねもろとも川の中へ投げこんだ。——夏の終りの曇つた日で、秋めいた冷めたい風が、水の上を、その橋の袂の鬱陶しく繁つた柳のかげを、心さびしく吹いて通つた。——そうした鑄い掛かけ松の……とんだその鑄い掛かけ松の真似も、かれにすれば、今度こそ是が非でも望みをとげるそのためにはまず着やを止めるこつた。——そうした強い決心をすこしでもよけいに自分にはツきりさせたいためだつた……

その午後、すぐかれは支度をして、その浅草座座附のある茶屋に倭をたずねた。河岸かしのそろいの浴衣に八端はつたんの三尺、脚絆がけ、手に菅笠をもつたそのときのかれのいでたちであつた。——志願者全部をあつめてそのなかゝら選抜する、だからもう一度明日来い、が、その恰好ではないけない。——倭の代理として出て来た若い男はかれにそういった。かれは丁寧にあたまを下げて引下つた。

あくる日、かれは、いわれた通りの飛白かすりの筒つつつぽ、天竺木綿の兵児帯へこおび……勿論それに汚れくさつた手拭を下げることをかれは忘れなかつた……という昨日とはまるで違つた拵え

で再びその茶屋の門に立った。百人近くあつまつた志願者のなかへかれも加えられた。――やがてそのなかゝら抜かれた二十五人のうちの一人に入つたと知つたときのかれの喜びはどんなだつたらう……

その日からすぐかれは稽古に入つた。わたされたかれの役は「戦争」の場に出る総出の支那兵だつた。

毎日いさんで芝居へかよつた。

大枚十六錢ずつの日給をかれはもらつた。

三

倭一座のその興行は大当りに當つた。――たゞに當つたばかりでなく、その一興行によつて、「書生芝居」というものが東京の劇壇にはツきりした存在を……ゆるぎのない根ざしをもつことになった。役者としてよりも興行師としての手腕をより多くもつ倭は、その機を外さず、すぐまたかぶせて二の矢を継いだ。今度は前とまるで眼さきの変つた探偵芝居をやつた。――そのとき二十五人のその臨時雇のうちからさらに篩ふるつて五人だけ見習生

に取立てた。——その筆頭がかれだった。

^{ひと}偏えにそれはかれの如才なさのたまものだった。たとえば、かれは、支那兵に扮するのに頭髪を丸坊主にしてかゝった。舞台の合い間には何くれとなく、自分からすゝんで上の役者たちの用を足した。それにはそれまでの稼業柄、すべて猪牙^{ちよぎ}がゝりに気を軽く、いうことでも齒切がよく、何をさしても決してソツがなかったから、坊主、坊主とどれからも調法がられた。——とりわけ客員の由良には、かれがその一座でのめずらしい江戸っ子だったことを以て……ということは、その一座、上下合せて三四十人いたその大ていのものは関西だった。そもぐの倭からして京都の産だった。……ことさら眼をかけられた。——美貌の持ちぬしとして、本筋のいやみのない芸のもちぬしとして人気の高かった由良はいうまでもなく東京の生れ東京の育ちだった。

見習生になると一しよに、改めてかれは、自分から由良の草履をつかむことにした。そのあとまた乙部座員になり、大部屋頭になり、首尾よくついに甲部座員に昇進するまで三年とかれはかゝらなかった。どんぐかれは出世した。——柄^{がら}はなし、顔はわるし、どこに一つ役者らしい取柄のないかれのそうした出世は、つまりはそれも如才なさの、たゞもう「凝る」……役に「凝る」……それだけのことだった。——たゞそれだけがかれの生命^{いのち}

だった。——通りぬけの、どんなつまらない仕出しでも、つまらなければつまらないほど、どうにでもしてそれを生かそうとのみつねにかれは苦勞した。——いえば、なげやり投遣な、大ざっぱな、ぶツきら棒なその仲間たちのあいだを縫って、はつらつと、若鮎のようにかれは閃いた。

倭とわかれて由良の手もとに返つてからは一層その影が舞台に濃くなった。由良の一座になくはならぬ愛嬌ものになった。かれが出るとわけもなく客は喜んだ。劇評家たちは、その見巧者みこうしゃぶりをみせたいため、興行毎に必ずかれについて必要以上の筆を費した。——かれとして有頂天にならざるをえなかった。

ちようどそのころである。市村座で『闇黒世界』という西洋種だねの新狂言をやることになった。「本読」ほんよみを聞くと、その中に、主人公の催眠術師が一人の男をその術にかけ、自由自在にそいつを翻弄するところがあつた。——黙って聴いてはいたものゝ、由良の催眠術師でその術にかゝる男は自分——そう来るもの、そう来なくつちやアならないものとひそかにかれは北叟ほくそえ笑んだ。——そうでなくつてもコヤの軽いことを始終味噌にしているかれである。……が、やがて役割の決つたとき、その役はかれのところへ来なかつた。その役をするものは外にあつた。……

四

かれは口惜しかった。その晩、一晚、まんじりとも出来なかつたほど口惜しかった。――夜明けに三十分ほどトロ／＼としたと思うと、いつだか歌舞伎座でみた『五十三次ごじゅうさんづけ 扇宿附』の「古寺」の場での五代目の怪猫がおくらの役を好き自由にじやらす夢をみた。――かれ自身そのじやらされるおくらの役になつていた。――何しろ五代目の相手である、もしこれをしくじつたら二度ともう舞台へ出られない。……そう思つてかれは一生けんめいだった、これさえうまく行つたら死んでもいゝつもりだった。――と、うむ、うめえ、お前は器用だ、書生役者なんぞ止めて俺の弟子になれ、……五代目にそういわれた。――やれうれしや。――そう思つたとき眼がさめた。――枕許に心細く籠かご洋燈ランブが消え残つていた。――自棄やけで、その晩、何としてもうちへ帰れないまゝ、平生ふだんひいき鼻負ひきにしてくれる浅草の待合へころがりこんでしまつた奴である……

が、そうはいつでも表立つてまだそんな苦情のいえる役者ではなかつた。たゞお客の間に評判がいゝというだけで、甲部座員とはいえ、いたつてまだ楽屋では榮はえない身分だつ

た。——由良という人のそこが堅いところで、いくら可愛い弟子でも、いくらその人間が仕出来しでかしても、だからといってそれだけのまだ貫禄もないものに決してそんな依怙えこの沙汰はしなかった。どこまでも東京人らしい律義さで、本末もとすえをはつきりと、立てるものは立て押えるものは押えた。——由良一座というものゝ団結の、その後でも、事なくずっと泰平につゞいて行つた所以である……

せめてその役をうけとつた奴がどんなことをするか？　どんな不味いことをしてカスをくうか？　——よそながらそれをみて、ざまアみろ、出来るもんか、そんなこつて師匠がうんというものか、そういつてひそかに自分だけ溜飲を下げるのが当時のかれとして出来るせい／＼の心ゆかせだった。その目的でばかりかれは稽古に入った。——生憎なことに、また、そのときに限つて、かれの与えられた役は凝ろうにも凝りやうのない車夫の役たった一つだった。

案の条、その役者、一日稽古をしたゞけで落第だった。体のおもうように動かないのがそも／＼由良の氣に入らなかつた。軽く、たゞもう軽くというのが由良の註文だった。——とてもだからいけなかつた……

「出来なきや仕方がねえ。……出来ねえものを無理にやれとはいわねえ。——だが、それ

じやアこつちの芝居が出来ねえ。」

……つねはそうした荒い物言をする由良ではなかった。たゞ舞台のことについてだけまれにそう癩癪を起して巻舌になった。同時にそうなるとこれ何う車を横に押すか分らなかつた。——誰も、たゞ、手をつかね、鳴りをしずめてその雲行の険しさをみまもるばかりだつた。

「軽業師を呼んで来ねえ、軽業師を。——軽業師なら出来るだろう。」

とゞ話はそこまでこじれて行つた。そこまで由良はつむじを曲げた。——そのときまらなくなつてかれは飛出した。——夢中でかれはその役をやらしてくれと由良のまえにいった。

「出来るか、お前めえに？」

「出来ます。」

「きツとか？」

「へえ、きツと。」

その晩からかれはうちへ帰らなかつた。一人芝居に残つて稽古をした。蠟燭をつけて三階で夜の明けるまで一心に稽古した。

五

一心にそう稽古した甲斐はあつてみごとにかれは成功した。一座のものをさえ驚くようなケレンをかれはやつてみせた。ことに最後のイルカ飛。——立っている人間を一しよに三人飛越すくだりについては、初日にみて、由良にしてその鮮さを激賞した。——果してその一幕が評判になり日々見物は突ツかけた。——こと／＼くかれは面目をほどこした。

と、ある日、その日も満員という大した景氣の日だったが、いつもの通り十分にその「狂い」をみせたあと、いよ／＼という最後のとき、どうした機^{はず}みかまんとかれは飛び損^{まえ}つた。前方へのめつて前歯を折り奥歯で片頬を貫いた。——衣裳の洋服はたちまち朱にそまつた。

そのまゝ楽屋へかつぎこまれたかれは一日一晚というものの意識を恢復しなかった。それほどの大怪我だった。が、一日^{いちんち}隔^おいたそのあくる日は河岸^{かし}の連中のある日だった。河岸の問屋の人たちが、古馴染のかれのため、大挙して見物に来てくれる日だった。それを思うと安閑とは寝ていられなかった。——勿論一人としてそれに反対しないものはなかった

が、かれは無理から起きて繃帯のまゝ舞台へ出た。そうしていつもよりもつと冴えたところをかれはみせた。——それほど血氣にみちたかれだった……

折った前歯は入歯によつて以前通りもとにすることが出来た。が、頬の傷はそうは行かなかった。あとまで長く痕になつて残つた。——が、そうはいつてもそれによつて、その位な傷にはかえられないほどの徳をかれはした。河岸の連中のいまゝでより一層肩を入れるようになったのは勿論延ひいて大根河岸だの多た町だの、およそ由良を最負にするそうしたさかり場からとも／＼幕だの幟のぼりだのがかれへまで来るようになり、同時にそれ以来、由良一座のタテ師としてかれは厚遇されるにいたつた。

が、かれの人気のそうした風にたかまつて来たのも、畢竟はそれは、由良の、由良一座の人気の日にましだん／＼たかまつて来たのによつてだった。倭とわかれたあとの二三年は、もと／＼無理な旗挙だったゞけ、色々さまたげもあれば困難も伴つた。一芝居は一芝居と蓋をあけるに先立つてまず金の工面をしてかゝらなければならなかった。小屋でも、本所だの深川だの浅草だのゝ小劇場、でなければ、腐つた、何をかけても客の来ないまゝ、誰もかまい手のないようなぼろ小屋、そうしたところでなければその一座の体を入れることの出来るところはなかった。由良はそうした小屋から小屋を転々した。——その間で、

倭のほうは、幾たびか歌舞伎座の檜舞台に成功したあと、座員をつれて息抜に洋行したり、小さいながら東京の真ん中に自分の持小屋を建てたりして並びない全盛をみせていた。

が、一たび由良の人気をえたあとはその全盛に拮抗するくらい何のわけもないことだった。間もなく、由良は、日本橋中洲なかずの芝居の太夫元と結んでそこを自分の定小屋じようこやにした。

——そのときには、座員でも、人数からいつて旗挙のときの三四倍になっていたばかりでなく、筑紫だの、志摩だの、白川だのという一流どこの巧い役者、綺麗な役者、達者なしっかりした役者が由良をたすけて側にいた。それには当初からの座員でも、ネツい、やかましい師匠のしつけの下に見違えるほどみんな上手になっていた。そうして大部屋のものでみんな素直で熱心だった。——それよりも一番強いことは舞台に美しい統一のあることだった……

六

かれが外の二人と一しよに由良の「三羽鳥」と呼ばれたのもそのころだった。——
外の二人とは、一人は「敵かたきやく役」で売った菱川、一人はかれと同じ三枚目。……といっ

ても、かれにくらべれば芸の幅がやゝ広く、ときには実体じつていな爺さん役なんでも器用にこなす鷲尾だった。ともに横浜以来の、古い、生はえぬ抜きの座員だったには違いないが、菱川だけは、そのまえ倭の一座にいて身分でも由良とそれほど違わなかった。平ひらの座員として力ナリ重用されていた。……といういゝ証拠は、はじめてかれが、西巻が、臨時雇募集の広告をみて浅草座の茶屋へ倭をたずねたとき倭の代理として若い男が出て来た。そうしてかれのそのときして行つた拵えについて注意した。——その若い男が菱川だった……

が、菱川は、かれとはまた違った意味で如才なかつた。倭と離れて由良の手に附いた當時は、勿論、だから、由良君、由良君と、呼ぶにしても君づけだったが、だんく由良が時をえて来るにつれ、いつかそれが由良さんになり座長になり、いよく「中洲」の芝居へ根を下ろすとなつたその前後には、完全にもう旦那、旦那……面とむかつてさえちゃんとう呼んでいた。——由良は弟子たちに、いつのころからか「先生」と呼ばせず、つねにそう「旦那」と呼ばせていたのである……

だからそうしたそもくを知らないものは、だれも菱川を、かれだの鷲尾だのと同じおんこ譜代。——大ぜいいる弟子たちのなかで特別ゆかりの深いものと思つていた。——そう思つて勝手に「三羽鳥」の一人にした。——いつそそれを喜んだ菱川は、それからとい

うもの、一層それまでより羽を伸ばし、ほう／＼由良の鼻負さき……兜町だの、木場だの、土木のほうだの、客さきを縦横に飛びまわった。

かれにするとそれが面白くなかった。面白くないというよりもっとすゝんで苦々しかった。さらにすゝんで不平だった。機会のあるごとに、かれは、そのいわれないことをだれを掴めても話した。が、それを聞いて、しんじつ眉をひそめるものよりも、手を打って

「其奴そいつアいゝ」と喜ぶものゝほうが多かった。

「当世だ。——それが当世だ。——器用にそう立廻る奴のほうがいまの世の中じゃア勝利をえるんだ。」

実際そうだった。如才ないといつても大根おおねでかれのような正直なものは……まえに「かれとはまた違った意味で」と菱川について特にそういった所以である……つねに菱川にけじめを喰った。番毎菱川に先手を打たれた。たとえば一しよに客の座敷に呼ばれたとしても、飲む、唄う、踊る、一人でその場を切廻し、一人でその場をさらって行くのが菱川だった。役者になるまえ大阪でしばらく落語家はなしかをしていたというわきにうそはなく、全く菱川は多芸だった。そうして「座敷をもつ」といった一切のそうしたことに妙をえていた。それにはそういう場合、舞台の役どこの「敵かたきやく役」ということが飛んだかえって愛嬌に

なつた。

そうした、その、惨めなはじめをくわないためには、後手にまわらないためには、かれとして飲んだくれるより外に方法はなかった。たゞもう出鱈目にそうするより外はなかった。それでもしなければ恰好がつかなかった……

「止せよ、おい、そんな無理に飲むなよ。」

「仙人」という綽名をもった鷲尾は……もう一人の三羽鳥はつねにそれを心配した。――が、世間ではそうしたかれをもつていつか金箔附の酒のみにしてしまった。

七

そのあと二十年。――そのあとの二十年はかれにとって、空^{くう}な、夢のような月日だった。いえば、その「中洲」時代がかれの役者としての峠、上り切るところまで上り切ったときだった。そのあとの二十年で、それまでの十年にそこまで辛苦して経^へ上^{のぼ}ったところからつまりはそろく下りかけた。……といっても自分には毛頭そのつもりはなかった……決してかれみずからそうは思わなかった。――なればこそ、空な、夢のような月日という所以

の、はつきりいつてあとのその二十年には、橋の上から盤台を抛込んだようなことも、日の出の勢いの倭一座を捨て、無人^{ぶにん}のみるかげもない由良一座に馳せさんじたようなことも、イルカ飛をとびそなつて一生残るほどの怪我をしたようなことも、そうした生きのいゝ、ふん切つた、花々しい感じのことは一つもなかった。タテ師として、三枚目として、愛嬌ものとして、古参として、世話焼として、三羽鳥の一人として、飲んだくれとして、たゞそれだけの存在として、由良一座の、いよく以てむかしとはかわつて来た大ぜいの座員のなかにかれは残された。——残念ながら、かれの名声は、とめどなく伸びて行く由良の、由良一座のそれに決して伴つて行かなかつた。

……とめどなく伸びたといつて、また、由良の、由良一座のその名声は、その二十年の間に、到頭また「中洲」から東京の真ん中にその一座を乗出させ、歌舞伎座だの新富座だの、そのころあつた東京座だの、そうした大きなところを隈なく打たせ、それこそ満都の人氣を一身にあつめさせた。——日露戦争のあとで、世間の景氣もいわれなく上^{うわ}ずつていたが、一つには倭が、その興行師としての手腕をあまりにふるいすぎたあげく失脚したのと、一つには、団十郎菊五郎死後の、無残に中心をうしなつた歌舞伎の世界のいたずらに混沌をきわめていたのが由良にとつてもつけの幸いになつたには違いないものゝ、なお

そこに、由良のその生れだちからの嫌味の無い、ネツい、慮りおもんばかの深い芸の力と、その一座のまえにいったその舞台の上の美しい統一とが、いまゝで嫌いでそうした「書生芝居」をみなかった人たちをさえ魅了するものがあつた。——それにはまた従来の、花柳界とか、花柳界を背景にしたそれ／＼のさかり場の客すじとかのたえざる後援のすさまじいものもそれにあずかつて力あつた。

その後、そのころ出来たある大きな演芸会社との契約が出来てその専属となり、嘗てかつ倭一座の重鎮だつた柳田だの藤川だの御園だのというたてものと一しよにしばらく芝居をしたが、そのうち柳田は死に、藤川は不治の病にかゝつて舞台を去り、御園は間もなく生れ故郷の大阪へ帰つて行つた。そうして天下は完全に由良のものとなつた。東京で「新派」……「書生芝居」だの「新演劇」だのという称呼はいまはもう返らぬむかしの夢になつたのである……といえは由良一座にかぎることになつた。——とはいえ、そのときは、由良をたすけて功労のあつた志摩も白川もその他の古い旗挙以来の生抜きはえぬの座員は、そのほとんどすべてがすでに死んだりいなくなつたりしてゐた。そうして残つたのは、実に、筑紫と菱川とかれとの三人だけだつた。——鷲尾はそのずっとまえ思うところがあるといつて役者を止し、みれんげなく堅気になると一しよに、飄然去つて岡山の田舎へ歸つた。

八

が、立てるものは立て、押えるものは押える由良の律義さは以前とすこしもかわらなかった。従つて菱川もかれも、身分だの しんしょう 給 金だのは、若宮のような売出しの花形には及ばないまでも、いえば新参の、吾妻や小倉たちのはるか上にあつた。——だから菱川の、いたずらにメハリの強い大きな声さえ出せばいゝとする「敵 かたきやく 役」がいかに「時代」で泥臭くつても、かれのつけた立廻りの手の以前ほどうけなくなり、むかしながらに凝つてやるかれの仕出しのいかに思案にあたわないう時勢おくれの場当りをやるにいたつたといつても、そうした由良の天下になったとき、とにかく菱川は万と声のかゝる金をこしらえ、「篋棒め、江戸っ子でえ」の、宵越の銭をもたないはずのかれにして、なお、八丁堀に格子づくりの、意気な、小ぢんまりした じぶんいえ 自分家をもつていた。——が、そうなくてもかわらないのは菱川とかれの仲だつた。——一度こじれた二人のあいだの交情はどこまでいつてもむすばれ解けなかつた。

が、かれにとつては何のことでもなかつた。かれにすると、むしろ、折合のつかないほ

うが勝手だった。義理を欠いてもそんな金をためる奴、金さえためればいゝという奴……そんな奴と一つにみられてたまるもんかというかれの肚だった。かりにも役者じゃアないか、芸人じゃアないか、芸術家じゃアないか。——その役者が、芸人が、芸術家が、うそにも判証文^{はんしょうもん}をとつて金を貸す、高利貸の真似をする、……というのは、菱川、たのまれゝば誰にでも、三十円、五十円、百円、ことゝしだいによれば三百円位まで、とるものをとつてつねに融通した。ちゃん／＼とさえして下されば、どうせ遊んでいるものですから、いつでもえゝ御用立します、こまる味はだれもおんなじです、といった調子だった。……そんな奴と、そんなあたじけない料簡の奴と一しよにされてたまるもんかというかれの存念だった。

が、そうはいつても在りようは、そのために、菱川のその片稼業^{かたしやうばい}のために、どんなにみんな楽屋のものは助かったか知れなかった。少々利息は高くつても、右から左、内輪ですぐにことの足りるほうが有難かった。だから楽屋うちの、かれと及び外の三四人を除いた以外のものは、そのほとんどすべてがそのおかげを蒙った。吾妻の如きその最もいゝお客で、とゞ終に公園へ身を売るにいたるまで、月々うけとる給金の半分は、手つかずいっつも菱川の手へもって行かれた。——吾妻がいなくなつてからの後釜には三浦がすわった。

——で、樂屋では、その理由を以て菱川を「チョコ銀」と呼んだ。チョコとはそのうちみから「敵役」の柄の、でくく脂肪^{あぶら}ぶとりにふとった大きな体を始終チョコマカさせるからで、銀とはすなわち「銀行」の意味だった。

が、かれにとつて、菱川との間はそれでよくつても、由良との間はそれではいけなかった。どうでもいゝですましてはいられなかった。——というものが、年々だんく師匠との折合がつかなくなつて来た。……というほどのことはなくつても、その間に、へんにどこか籠^{たが}のゆるんで来たような、ホゾの外れて来たようなかたちのあるのがかれに感じられて来た。十年まえ二十年まえのようにしっくりお互の間の呼吸^{いき}の合い兼ねるものゝ出来て来たことがかれに感じられた。——震災後ことにそれがハッキリして来た……

九

「中洲」時代にはそういつてもよく失敗^{しくじ}った。飲みすぎて舞台をトチツたり、喧嘩をして相手に怪我をさせたり、遊びに行つて出さなくつてもいゝボロを出したり、そんなことで始終かれは由良を失敗^{しくじ}った。いくら詫びを入れてもいづかな聞いてくれず、客さきへ泣き

ついても／＼口をきいてもらったことも二度や三度ではなかった。——が、その時分は、いくらそう失敗つても首尾をわるくしても、だからといってその間に、木戸が立つの歪みが来るのといったことは決してなかった。むしろ逆に、失敗れば失敗るほど、首尾をわるくすればするほど、その都度かえって親身な感じを深くすることが出来た。——だん／＼それが、一つにはとる年で、子供の大きくなったのをみれば、以前のようなそんな馬鹿も出来ず、無鉄砲な真似もやれなくなったには違いないものゝ、それにしても以前のようには、用捨ようしやなく呼びつけてキメつける、頭からこなしつける。——そうしたこと……：そうされることがとんとなくなった。同時に舞台のことでも、以前のように師匠、やかましくダメを出さなくなった。ダメを出さないということは一面ほめもしないということだった。訊きに行つてもハッキリしたことをいわなかった。——そのくせ東京の真ん中へ乗出してというものの、他の座員たちに対しては、以前より一層ネツく、以前より一層きびしく、すべてにわたつて巨密こみつに由良は指図した。——その指図をうけないのは、筑紫と、菱川と、かれとの三人だけだった。——いえば別扱い。……：そうした水臭い、他人がましい、情の強い師匠こわになった……

そうなると自然、そこに芝居以外で顔を合せるといふこともなくなる勘定だった。神詣

りとか、座敷とか、義理さばきとか、そうした色々な機会おきの供の中に欠けることも多くなれば、決してそのほうへは足を向けても寝なかつた今戸の自宅、……それは、由良の、横浜旗竿時代からの古い住居で、一ころかれは鷲尾と一しよに、そのころまだ独身だつた由良をたすけて一年あまりそこに寝起し、煮炊のことから何やかや一切引受けてやったことさえある……そのほうへもだん／＼足が遠くなつた。盆とか、暮とか、正月とか、そうした折目切れ目以外には、これという用のない限り、ときたましか顔を出さなくなつた。顔を出してもどこか氣ぶツせいなので、由良のまえには長くないず、すぐ奥へ行つて御新造ごしんぞだのお嬢さんだのゝまえに安氣あんきな時間を送つた。——御新造やお嬢さんはかれが最負もといだつた。が、その後、御新造も亡れば、今戸のそのおもいで深いうちも震災で、跡方なくなつた。——それ以来、由良は、今戸を捨てゝ今の矢の倉へ移つた。八丁堀と矢の倉だから、まえの今戸のことにすれば、すぐもう隣といつてもいゝ位の近所になつたのである。以前だつたら、毎日のように、それこそ喜んで常じょうびツたりになつたに違いない。……が、御新造のいなくなつたいまとなつては、たのむ木蔭はお嬢さん一人。——以前にましていよゝかれの足は遠くなつた。

だから、今日の訪問は、実に夏なつ以来このかたの三四ヶ月ぶりである。——いくら何んでもあん

まり義理がわるすぎる、今日こそ一つ、しみ／＼あやまってやれ、ことによつたら思うさま久しぶりに愚痴もこぼしてやれ……そう思つてかれは、その矢の倉の、半西洋の、手勝手のわるい、取ツつき悪い感じの玄関に立つた。そうして景氣よくまず呼鈴を鳴らした。——が、出て来たのは顔を知らない女中で、先生はお留守でございます……膠もなくそういった。

「じゃアお嬢さんは？」

「お嬢さまもお留守でございます。」

「どこへおいでになつた？」

「お嬢さまは今日はお寺詣りにおいでになりました。」

「と、おきたさんもないのか？」

「へえ、おいでになりません。」

おきたというのはむかしからいるお嬢さん附の古い女中である。この女中がいれば誰がいなくつても「まア西巻さん」と出て来てすぐ恰好をつけてくれる。——でなくつても、いゝえ、押していえば、書生でも下男衆したおとこしゅでもだれか話の分るものがあるに違いない。——が、そんなものに逢つたつて仕方がない。それより黙つて帰つたほうがいゝ。——ふ

いとなぜかそんな気がした。

「ぼくア西巻だ。——よろしく申してくれ。」

そういつてかれは、手に下げた小田原屋の漬物の樽……かれの歳暮の挨拶はいつもそれときまつていた……をそこへ置くと、そのまゝすぐ、その無愛想な女中をうしろに門の外へ出た。——で、一人寂しく矢の倉の河岸^{かし}を両国のほうへあるいた。

十

「おや？」

急にかれは立留った。——その少しまえ、向島^{うし}で、牛の御前^{ごぜん}のまえで田代がそうしたように。——なぜならいまゝで展けていた河の光景^{けしき}……あかるい河のうえの光景が急にそのときかれのまえに姿を消したから……

そこに、河岸から、栈橋でつながれた船料理。——いつみても客のない、ガランとした……ことに寒い時分にあつて一層その酷い……いえば手持無沙汰な感じに水の上をふさいでいる大きな船のさまと、それへさそう無器用な門とのぼつねんとそこに突ツ立ってい

るのはむかしながらのけしきだが、そのあと、そこから両国の袂の、一銭蒸汽の発着所のあるところまで、以前はそこに、河の眺めを遮る何ものもなかった。むしろ寂しい位おどかに往来する船のすがたや、いそがしく波を蹴立て、行く蒸汽のさまや、まん／＼と岸を浸してながれる青い水のひかりや、その水を掠めて飛ぶ白い鷗のむれや……そうした光景があからさまに眼にうつった。――が、いつかそこには東京通船株式会社の、倉庫なり事務所なり荷揚げ場なりの古トタンをぶつけた、大きな、うす汚いバラックがいわれなく立ちほだかつていた。そうしてそのぐるりには、石油箱だのビール箱だの、石炭を入れる吠だの、鶏を入れるような、大きな、平ツたい竹籠だの、およそ野蛮な、ぎツかけない、わびしい感じのするものが堆くそこに積まれてあつた。――縄切や菜っ葉の屑のごみ／＼散乱つた道の上に焚火している四五人の人夫のむれも、そこから出るお台場行の汽船の大きな看板も……いえばそれも震災まえにはみられなかったものである……その下にさがつた活動写真のビラも、折からの曇つた空、極月のその曇りぬいた空を、一層暗く、一層味気なく、一層身にしむものにするのに十分だった。

「酷くなつたなア……」

自分に歎息するようにかれはいつた。――矢つ張、田代が、長命寺の境内の登のうえに

立つてそういったように。——が、田代の場合のは、あながちそれを田代の場合に限らない、小倉がいつても三浦がいつてもいゝ台詞せりふだった。が、かれのこの場合のは、とくにそれがかれに限った感慨だった。——なぜなら、そのあたり、浜町河岸から矢の倉河岸へかけて、実にそこは「中洲」時代のかれのなつかしい「巢」だったからである。一晚といえどかれは俵をその河岸にとばさなかったことはなかったからである。芳町から柳橋へ、柳橋から芳町へ、役があがるとすぐかれは芝居を出、あるいは魚河岸の客に、あるいは兜町の最負に、あるいは木場の旦那に、呼上げられてはつねにその界限の有名な茶屋小屋……岡田だの、福井だの、亀清かめせいだの、柳光亭だの、深川亭だのに始終もう入浸りになつていたのである……

かれは眼を転じて電車通りをみた。そこには広い道の上を電車に交つて自動車と自転車が目まぐるしく行交ゆきかつてゐる。その間を縫つてトラックが絶えずけたゝましい地響をさせてゐる。——が、嘗ての日のあれほど矢のように飛交とびかつた俵の影は？ ……なつかしい、馴染のふかいあの俵の影は……？

「変つたなア……」

じきにかれは歩き出した。——あてもなく一人寂しく両国のほうへかれはあるいた……

みぞれ

一

「で、どこへ行こう、こゝへ行こうのあげく向島へ……」

「とは、また、酷く拈^{ひね}った……」

「というのが、いゝえ、その病氣見舞に行つたさきというのが吉野町。……毘沙門さまのすぐそばなんで歸りに山谷堀についてぶらゝあるいているうち、どうだ、百花園へ行つてみねえか。——小倉君がそいい出したんで……」

「と、あなたと、小倉さんと、それから三浦さんと……?」

「それだけで。——三人だけで。——とにかく小倉君という人は御存じの通りの風流人、——ごみくしたところよりしずかなところのほうが好きなんです。」

「いまの節^{せつ}では、しかし、百花園……?」

「何にもみるものはありやアいたしません。ほんとうの冬枯の、薄が枯れて立っているばかり。——人だつて、だから、一人も入つておりやアしません。」

「それには、一ころほど、百花園とあんまり人がいわなくなりましたから。」

「いわないのが当りまえ。——外ほかに行くところでもないように、あんな面白くもない、不由つたらしいところへ行く籠棒があるもんじやアごんせん。——しづかを通り越して、寂しい、心細い……しまいにはへんな氣になりました。——三十分ばかりいて匆々そうそう外へ出ました。——で、小松島から蒸汽に乗……つたのはいゝんですが、これがまた、勘定するほどこしか乗客のりてがありません。ガランとしております。——窓のそとをみるとさむ／＼と……そういつてもさむ／＼水が流れています。」

「……………」

「いよく以て心細くなつたという奴が、みんなその陰氣なけしきに被圧けおされて口をきません。——さすがの三浦君でも無駄をいけません。——吾妻橋に着いてやれうれしや……ほんとうにそう思いました。——一杯、とにかく一杯、そういつて蒸汽を上るとすぐ、半分夢中で、いそいでこゝのうちへ駆けつけました。——で、威勢よく……ガラツと威勢よくおもてをあけると金平さん……そこに、ぼんやり、一人で金平さんがチビ／＼やつて

いるじゃアござんせんか。」

「と、では、はじめから西巻さんは御一緒……?」

「……じゃアなかったんで。——ヒョックリそうこゝで落合ったんで。」

「あゝ、それで……」

「お互に、おや? ……ということになって、これ。——ちようどそう、あなたのいまいらつしやるところ、そこんとこに金平さんがいて、われゝ三人そのまえに陣取りました。——で、さア四人でそれから飲みでした。」

「と、もう、お三人のみえたときには、西巻さん、さきへあがつておいでだったんで?」
「二三本もう並んでおりました。——が、ちつともまだ酔っておりません。——酔っていないどころか妙にこれが沈んだ元氣のない顔をしております。」

「はて?」

「それが——それが、いゝえ、可笑^{おか}しいんで——いかにもそれが金平さんらしい理^{わけ}由^なんで……」

そういつて、その一人は、話にほぐれてしばらく閑却してあつた自分のまえの猪口^{ちよく}を氣のついたように取上げた。——その一人というまでもなく田代要次郎。——もう一人の

熱心な聞き手のほうは日本橋の「うたむら」という待合の主人である……

二

「その日、金平さんは、『矢の倉』の師匠のところへ歳暮に行った人なんで。」

すぐまた田代はいった。「と、生憎、師匠も留守ならお嬢さんもいなかったんで、そのまま玄関で引返し、河岸をぶら／＼両国のほうへあるいて行くうち、ふツと気のついたのはこのごろすっかり変ったあすこいらの光景。——あたくしなんぞでも、通るたんび、変ったなアとしみ／＼思いますからあの人だったらよけいそうだろうと思います。——

早い話が一つ目へ行く渡しもなくなれば四つ目の牡丹へ行く早船の看板もみえなくなり、以前の^{むかし}のように暢気に釣なんぞしているものは一人だってありません。——それには電車の通るのさえ可笑しい^{おか}ほどしずかだったあすこの往来を、そういつてもしツきりなし、自動車だの自転車だのがやけに通ります。——はじめてゞもみた光景のように、金平さん、そのためトボンとしてしまったらしいんで……」

「いゝえ、そういうこと、わたくしなんぞでもとき／＼あります。始終みつけている光

景でも、時の表裏で、いまさらのように、おや？——そう思つて狼狽あわてゝ眼をこするこ
とがあります。」

「そのなかで、いゝえ、もう一つ金平さんのビックリしたのは俵の通らないこと。——そ
んなにも自動車や自転車の通るなかで人力というものが一台も通りません。——空俵一つ
通りません。」

「なるほど。」

「俵なんてものはなくなつてしまつたんだ、いつの間にか東京の往来から消えてしまつた
んだ、だれももうそんなものを相手にするものはなくなつたんだ。……はつきりそうその
証拠をみせつけられたような、何ともいえない心細い、いやアな気がしたというんですが
……」

「西巻さんらしい。」

「そのまゝ電車通りを越して柳橋のほうへ入つたといいます。——義理にもすぐ電車に乗
れない、とてもそのまんますぐうちへ帰れない……といったかたちの、そのトボンとした
料簡で、代地だったら場所柄だ、一台位通るだろう。……そう思つたんだそうです。が、
半チクな時間だったからか因果とやつぱり一台も通りません。——それにはすれ違げいしう芸

妓でも箱^{はこ}丁でも一人として知った顔がなく、一人として天下の西巻金平を問題にするものがあります。——みんな知らん顔でそばを通って行きます。——こうまで俺も売れなくなつたか？ おもわず立止つて溜息をついたといいます。」

「以前だつたら通り切れるこつちやありません。」

「真逆^{まささか}それほどもないでしょうか……」

「以前、いゝえ、木場の福井さんという方がおいでになりましたね。——わたくしなんぞも御鼻負になりましたが、この方が大した遊び手で、福井さんといえほどの花柳界でもそのころ知らないものはない位。……とりわけ柳橋が好きで始終あの土地^{しま}へ行つておいでゝした。——西巻さんはその方の大のお気に入り。……お側^{そば}去らずの恰好でしたから柳橋で西巻さんを知らなかつたらそれこそモグリ。——それはもう大した御威勢でした。」

「と、当人のいうことでもまんざら懸値の……？」

「いゝえ、それは。——それは、もう、その時分だつたら知らないものでも先方^{さき}から頭を下げて来ました。」

……年の市の昨日^{きのう}にすぎた今日。——そうでなくつても一段落ついた感じに、このあたりどこともなくガラソとうらさびしいのが当りまえのところへ、昨夜^{ゆうべ}からふり出した雨が

みぞれさえまじえていまだに小止みなくふっている。——さすがに、だから、いつも繁昌のこの「菊の家」も二人の外にはだれも客がない……

三

「しかし、実際は……」すぐまた「うたむら」の主人は言葉を継いで「いつかはそういうことになる、……そうなるときが来るとはわたくしどもでもそう思っておりましたが、こんなに早く、こうまで急にそうなろうとは。——わたくしどもにいたすと不思議……というよりは怖い気がいたします。」

「……………」

田代は、鯛チリの、豆腐をすくいかけた眼を相手のほうに向けた。

「いゝえ、俵。——おんなし人間を人間が乗ツけて曳く。……いゝものじゃアごんせん、決していゝ図のものじゃアごんせんが、わたくしどもの若い時分には外に何にもたよるものがなかった。——鉄道馬車があり、円太郎馬車があったものゝ、いまの電車のように方々すみ／＼まで四通八達はしておりません。すこし遠みちをしようというとき、知ら

ない土地へ行こうというようなとき……そういうときには嫌でもそれに乗らないわけにはまいりません。——つまりわれ／＼、その全盛のときに生れ合したんで、よけいそれだけに無常を感じます。——西巻さんにしても矢つ張それ。——あなたがたのような若い方から御覧になったら、いゝえ、どうでもいゝことゝしかお思いになれないかも知れませんが……」

「うたむら」の主人はわらつて猪口ちやくをふくんだ。

「いゝえ、あたくしたちにしたりして、それは。——矢つ張それは春なんぞ、出を着た白襟の芸妓衆のそれに乗つて通るのを、いゝなア、綺麗だなアとうれしがってまいった玉ですから。」

「それさえこのごろは、新橋なんぞでは、三人と四人一しよだと円タクで運んでもらう。——そのほうが手ツとり早くもあれば、第一けいざいに上るといいます。——なるほど、それは、そうすれば俵夫くるまやにやる御祝儀だけで事が足ります。——あながちそれを悪口とばかりいつてしまえないというものは、いまの若い妓こたちは、俵へ乗るのをあんまりうれしがらないかたちがあります。——春でも、ですから、出を着たつて以前のようにむき出しには乗りません。ちゃんと、みんな幌をかけさせます。」

「一つにはしかし寒いんで……」

「いえ、御尤も……」

かるくそれを外して「うたむら」の主人は鍋……といってもこのほうは鮫鰯鍋……のなかへ箸を入れた。——話が切れると、おもての油障子に、さら、さら、とふりかけるみぞれの音がしのびやかに聞えた。

田代は箸の尻を返して焔炉こんろの火を突ツついた。

「しかし、いゝえ、それは俵のことばかり申せません。」わらつてまた「うたむら」の主人は話を掻出かいだした。「震災まえまでさかつていたもので、こゝへ来て、この五六年でバタ／＼といけなくなつたものは外にもたくさんあります。——が、そのなかで、人のあんまり気のつかないもので、まるでその立つ瀬のなくなつた、あわれな、惨めな稼業があります。……お分りになりますか？」

「それは、どういう方面の？」

「いゝえ、あなたがたにもまんざら御縁のくないもので……」

「と、それは？」

「そうなるのがほんとうの……そうならなくつちやアならなかつた稼業ですが……」

「さア？」

四

「芝居茶屋です。」

「……………」

「以前わたくしどものいたしておりました稼業……」「うたむら」の主人はもう一度わらつて「俵のほうは、これ、東京でこそ相手にされなくなりました。一足、東京の外へ出ればどうにかまだ露命はつないでおります。が、このほうは、どこにもそういう逃げみちがきません。——ペしやんにされたらそれつきり、どうにも外に方返しがつきません。ほうがえ」。

「なるほど。」

「いつかそういうことになる、そうなる時が必と来る、矢つ張そうは思っておりましたが、真逆まごかこんな早く、こうまで急にそうなるうとは。——思うと、矢つ張、夢のような気がいたします。」

「あたくしなんぞでも、それは、お茶屋さんのまえにずっとあの花暖簾のかけわたしであつた光景けしきを昨日きのうのように覚えております。——二長町、久松町、新富町……芝居の好きなものは小屋のまえを通つたゞけでもぞく／＼したものです……」

「高島屋さんが西洋から歸つていまゝでの芝居の仕来りを改良なさろうとなすつたのが明治四十一年。……一がい茶屋や出方でかたを止そうとなすつてみごとおしくじりなすつた。——帝国劇場というものが出来て、茶屋も出方もつかわないあたまで西洋式の切符制度というをやつてみせたのが明治四十四年。……時間もこのときはじめて外の芝居のように昼間明るいうちからでなく夕方あける。——二長町の室田さん……興行界の大御所といわれたあの室田さんがそれを聞いて、結構だ、改良も。——が、それじゃア、まだ、いまの芝居は立行かない。——そういいなすつたというものが芝居の一ばん大切だいじなお得意は花柳界……夜芝居じゃアその一ばんの大切なお得意さまに都合がわるい。——あの方にしてそういう。……そんなときから、あなた、十五年にしかありません。」

「十五年……」

田代は感心したように首をふつた。

「変りました。——實際この世界ばかりは変りました。」

「うたむら」の主人はしずかに銚子を取上げた。

「いま、しかし、芝居の一ばんのお得意さまを花柳界だなんぞといったら……」

「酷い目にあります。——そんなことをいつてるから時勢におくれるんだ。相手にされなくなるんだ。……目の玉のとび出るほど叱られます。」

「そこ。——そんなんで……」

「それについていゝ話。——あなた、遠州屋を御存じでおいででしょう？」

「えゝ、あの、清元のお上手な？」

「まアゝ素人にしちゃア。——あの男、わたくしどもの仲間でも、いまだに五代目ほどの役者はないと思つていたり、空也念仏の連中と附合ったり、芸妓げいしやに兄さんといわれて喜んだり、よほどその古風に出来上っております。——震災後、わたくしどもはもう見切をつけて、外の稼業にそろゝ取ツつこうと思案をして居る中で、遠州屋だけは強情に、仮りにも東京に茶屋のある芝居の一けん位ないつてことはない、そんなみツともない奴はない……そういつてしきりにそつちこつち此方運動をしてあるきました。いゝ加減金もつかつた塩梅でした。——と、ある日、矢つ張その用で二長町の芝居へ行き、いつもの伝に仕切場……とはいいいません、このごろじゃアどこでももう事務所……ずつとその事務所へ通ろう

とすると、もし／＼どこへおいでになります？——いきなり女給さんに木戸を突かれたじゃアござんせんか。」

五

「だって、それは？」

「随分、いゝえ、分らない話。——が、あの男のこつてす、涼しい顔で、一寸、えゝ、事務所まで。——と、あなたさま、どなたでいらつしやいます？」

「どなた？」

「遠州屋ですよ、わたし。——そういつたらいかに相手が新米の女給さんでも分るだろう。……分らないまでも誰か分るものを連れて来るだろう。……そう思ったのが大へんな間違い、遠州屋さんでどちらの遠州屋さんでいらつしやいます？」

「戯談じようだん……」

「しみ／＼、遠州屋、あとで愚痴をこぼしました。——あんまり情なくって俺ア泪も出なかった。——発心ほっしんして俺も君たちの真似をするよ。——たのまれたってもう茶屋なん

ぞはじめるもんか。」

「それアそうです。——遠州屋さんのそう被^{おっしや}仰るのは当りまえです。……いかに昨今の、ものを知らない相手だつて、仮りにも二長町でつかわれている人間が遠州屋さんを。……そんな無茶な、分らない……」

「と、わたくしどもでもそう思います。——が、一足しりぞいて考えるとそのほうがほんとう。——知らないほうがほんとうだという気がいたします。——つまりは西巻さんのいまの柳橋のお話……それとおんなし道理だと思ひます。」

「旦那のようにそうあきらめておしまいになつちやア。——あたくしなぞ、まだ、そうなんだなア、そういう世の中になつたんだなアと思つても、いざとなると矢つ張そこにうぬぼれが首を出します。」

「それは、あなたは、お若くつておいでだから……」

「いゝえ、それが。——外のことじやアそうもうぬぼれもいたしませんが……」やゝ鼻白んだかたちにわらつて田代は料理場のほうをふり向いた。「下さいな、お銚子を。」

「ついでに此方へも……」と「うたむら」の主人もその尾について「お話が面白いもんでつい今日はいたゞきます。」

「折角、しかし、お一人で飲^{あが}つておいでのところを。」

「いゝえ、こちらはもう相手ほしやでおったところ。——そちらこそ飛んだ御迷惑で……」

「いゝえ、あたくしはもう。——それよりぶちまけて一ついゝ機^{おり}会だからあたくし旦那にうかゞいたことがあります。」

「何ですか、しかし？」

「いゝえ、旦那なら。……きつと旦那ならハッキリいつて下さるだろうと思うんで。」

「とてもそんなむずかしいことは……」

「いゝえ、やさしいことなんで。——『新派』つていうものはこのさきどうなりましょう？」

「……………？」

「それと『女^{おんな}形^{がた}』つてものはこのさきどうなるんでしょう？」

「……………」

しばらくして「うたむら」の主人は口を開いた。「さア……」

「お待ち遠さま。」

小女^{こおんな}が、そのとき、田代と「うたむら」の主人の前へそれ／＼熱い銚子を運んで来

た。

六

「あたくしは、いゝえ、御存じの通りの暢気もの。——ついぞ、そんなこと、思ってみたこともなければ、そばで誰が何といおうと平気なもんで、だからお前は後生^{ごしょうらく}樂だの、苦労を知らないふところ育ちだのと、小倉君や三浦君によくそういわれます。——いくらしかしそういうわれても『新派』つてものはどこまで行っても『新派』、由良一座というものはどこまで行っても由良一座。……新しい芝居だの剣劇だのがいくらさかつて来たつて、それはそれ、これはこれ、だからといっていまさら『新派』の土台の動くわけはないと思います。——それアあたくしだつて、行詰つたの、長い正月はないの、世間でいろ／＼キザなことをいうのも聞いていれば、見物だつて、それア、ときによると以前の半分も来ない。……どうしてだろう、こんなはずじやアなかったがと思うことだつて、この四五年たび／＼あるようになりました。——でも、それは、ものゝ流行^{はやり}すたりはどんなものにだつてあります。——いえばそれがあるから芝居だつてすゝんで行くんだと思います。」

「それは、もう……」

「よく金平さんがいいですけど、ずっと以前旧派の人たちが新派に押され、古いものばかりやっていたんじやアお客が来なくなつたんで、いまのあの歌右衛門さんや幸四郎さんが、『不如帰』^{ほととぎす}や『乳姉妹』をなすつたつてこと。——つまりはそれだつて、そういう旧派の芝居のうまく行かない時節にぶつかつたからそんなことにもなつたんで、だからといって旧派がそれつきりになつてしまやアいたしません。——それつきりになるどころか、いまじやア以前より^{むかし}もつとさかんになつて来ています。」

「それは、もう、それだけの価値^{ねうち}のあるものでしたらそれつきりになんぞなるわけがありません。いつか、また、キツと時節がまわつて来ます。——でなかつたら、あなた……」

「そうでござんしよう。——ですから。——ですから、あたくし、先刻^{さつき}申したうぬぼれのうちのまず師匠、筑紫さん、汐見さん、もう一人、若宮君……」

「お世辞じやアござんせん、实际みなさん、しっかりした方ばかりです。」

「新しい芝居だの、剣劇だの……剣劇なんざアはじめツから問題にはなりません、『芸』つてことのうえで、この四人の足もとへでもよツつける役者が何人あります？ それだけの修行をしているものが何人ござんす？ ——旧派さんのなかにだつてほんとに肩を並べ

ることの出来る人たちは十人とはいわないだろうとあたくしは思います。」

「そ、それアもう……」こと／＼く「うたむら」の主人は同感のように「ことに若宮さん。——若いけれど、あの方。——あれだけの女形さんは旧派にだって……いゝえ、いまの旧派の女形の中にはとてもあんな方はありません。」

「そういつて下さいますか？」

「それは、あなた、わたくしは大の若宮さん贔負。——顔のあの通りいゝ上、品があつて、色気があつて、何ともいえないしつとりした味があつて、することからいつたつて女優なんぞ……いまいる女優なんぞそれこそ足もとへもよれません。——女形の天才。——あゝ、という方のいる間はまだ／＼女形は……女形はどうだなんてことに、いゝえ、なりつこございません。」

「それが——それが、その……」急に田代は遮るように「自分で、若宮君、女形をこのごろ嫌だといつておるんで……」

「女形を嫌だ？」

「ふつ／＼嫌だから止したい……」

「そ、それは、また……？」

かぶせて田代はいった。「ですから。——ですから、あたくし……」

七

……と、そのとき、しずかに入口があいた。

「何をしているんだな、おい。」みるなり田代はキメつけるようにいった。「三筋町^{みすじまち}からこゝまで何時間かゝれアいゝんだ？」

「お前のようなヒマ人じゃアないよ。」

入って来た小倉猛夫は、むツつりと、でも、「うたむら」の主人のほうへそれとないこなしをして、そういうながら田代のいるテールのほうへすゝんだ。

「でも、電話をかけたら、細君が出て来てすぐ行くといったじゃアないか？」

「うるさいからそういわしたんだ。——雨の中を、何も、幾たびもそんな人のうちへ行ったり来たりさせるこたアない。」

しずくの垂れる傘を小女^{こおんな}の一人にわたすと、大きな体を田代のそばに割込ませ、すぐに小倉は手焙^{てあぶ}りのかげに置かれたしながきを手もとに引寄せた。

「おい、君、御紹介しよう。——日本橋の『うたむら』さんの御主人……というよりはもとの二長町の……」

「分つてる。」田代のそういうのを押えて「御挨拶はしないがお目にはよくかゝっている。

——小倉です。」

いつそ無愛想に小倉は頭を下げた。

「いゝえ、わたくしも、舞台では始終……むかしまだ常盤座においでの時分からお目にかゝつております。」

それにこたえて「うたむら」の主人は愛想よく会釈した。

「舞台のまんまの、舞台もふだんもちツとも違わない、気のいゝ、ごく大味な……」

すぐ、また、田代のそばからそういいかけるのを「黙つてろよ、うるさい。——酔つてるのか、もう?」

「酔つてる。——すこしいま酔つて来た。」

「だらしのねえ。——酔つてなんぞいるんなら来るんじやアなかったんだ。——急な用だというから出て来てやつたんだ。」

「さ、まア、一つ……」田代はそれにはこたえず「酔つたつて、そんな。——酔つたつて

ちやんと、新派というものがこのさきどうなる、女形つてもものがこのさきどうなる？――

――旦那と、いまその研究をしているところだ。」

「ふん。」小倉はそれに乗らず小女に「姐^{ねえ}や、おい、わたしには蟹をくれ。」

「ですから。――ですから、あたくし……」田代はそのまゝ話をもどして「考えました。

――考えました、あたくし……」

「しかし、それ？――またどうして若宮さんが、そんな？」

「うたむら」の主人は注意深く田代の顔をみた。

「女形つてものは片輪なもの。――どうしたってそういわれるのがほんとうのもの。――

どうしたってこれからは女優……女の役は女がやらなくっちゃアいけない世の中が来ている……」

「でも、そういつても、その女優さんたちがみんな不味^{まず}けりやア、これ……」

「喧嘩にならない。――だから素晴らしいました、あたくしも。――と、それはいまゝでの見物……古くから芝居をみて来ているいまゝでの見物だけのいうこった。これからの、だんゝ出て来るこれからの見物は決してそうみやアしない。――よし不味くったってこれからの見物にはそのほうがほんとうだ。いくらうまくったって女形は嘘だ。同時にまた何

時どんな女優が……どんなに世間を驚かすような巧い女優が出て来ないってことがどうしていえる？」

「なるほど……」

……運ばれた蟹の足をたんねんにむしりながら、小倉はそれにあずからず、しずかに一人、猪口のかずを重ねた。

八

「しかし。——しかし、この間の……」 「うたむら」の主人はなお肯^{うべな}えないように「この間の本郷の芝居の、悪い親^{おやき}同胞^{ようだい}をもったゝめに苦勞する若い芸妓。……あの役なんぞ、わたくし、しみ／＼巧いと思いました。何という好い味をもってる方だろうといまさらのように感心いたしました。——そう申しちゃ何ですが、わたくしどもが拝見しても脚本^{ほん}としたら随分悪い脚本……実^みのない、辻褄^{つじつま}の合わない、いまだきどうしてこんな時代なものを由良さんがなさるだろう？ ……失礼ながらそう思った位でしたが、そのなかであの若宮さんの芸妓だけは、脚本を離れて、いかにもそうありそうな、無理のない……こ

とに、あの、しまいに気の違つて来るところなんで、よくまアあれだけ、細かなしんみな芸がみせられる。……ほんとうに、わたくし、しみ／＼涙のこぼれるほどそう思いました。」

「いゝえ、あれは、若宮君のこのごろでの当り役。——楽屋でもみんなそういつておつたんで、そのわりにあれの評判にならなかつたのは全く狂言がわるかつたから。……残念だつたと思います。」

「わたくしにいわせれば、うそもかくしもなく、新旧つツくるめたうえの今年中でのみもの。——そこまで、いゝえ、買いたいと思つたくらいなもので……」

「そういつていたゞくとあたくしどもまで肩身の広いわけになります。……けど、あれをやっている間でも、自分じやア若宮君、ちツともそれを喜んじやアおらないんで、そばで何かいうものがあると、止よしてくれ、たのむからそんなこといわないでくれ。……此方こつちは、もう、いやで嫌でたまらないんだから。……何の因果でこんな業さらしを……かゝなくつていゝ恥をかいてるんだか分らないんだから。——そういつて、あなた……」

「……………」

「げんにいわれました、あたくしも。——あげまく揚幕へまわつてみているといきなり入つて来

て、何だ、要ちゃん、何をみているんだ？——というから、おやじが是非みて置けといったからみているんだ。——そういうと嫌な顔をして、そんなことをわざというんだ、此方が捨てゝかゝつてゐるもんだからわざとそんなことをいうんだ。——やつてゐる当人のつまらないものをみたつて面白いわけがない、そんなものをみたつてはじまらない、止し給え、止し給え……」

「……………」

「これが評判が悪いとか、人氣が落ちたとかいうなら氣を腐らすわけも分ります。そうではないんだけこまります。——それだけ此方も。——いゝえ、いくら暢氣でも、これ……」

「お幾つです、若宮さん？」

ふいと「うたむら」の主人はいった。

「あたくしより三つ上ですから二で……」

「と、来年三十三……？」

「そうなります。」

「で、どこか悪い……ということもべつに？」

「えゝ、それは。——ほッそりしているわりには丈夫な方で……たゞとき／＼、どうか

すると寝られない。——夜よく眠れない。——そういつちやアよく、そのほうの薬を飲んでおるようですが……」

「あんまり、それは、詰めてものをお考えに……」

「そうなんです。——あんまりものを深く考えすぎるんです。——あんまり気を細かにつかすぎるんです。——師匠もそれは始終心配しておるんですが。」

「役者なんてものはお天気のほうがいゝんだ。」

……と、そのとき、どう思ったか小倉が口を出した。

「お天気の？」

「そうよ、お前のようによ。」

おもむろに小倉は蟹で汚した指を拭いた。

九

「いや、これは、すっかりお饒舌しゃべりをしてしまつて……」

おもい出したようにそういつて「うたむら」の主人の立上ったのはそれから間もなくだ

った。

「お帰りですか？」

田代はやゝ名残の尽きないかたちに行った。

「でももう、あなた、四時になります。」「うたむら」の主人はしまった時計をもう一度出して「今日は、実は、昼まえからうちを出ておりますんで。——区劃整理のことで田町の地主のところまでまいったかえり、ふいと思いついて吉原の……御存じでしょう、お直婆さん？」

「えゝ、知っておりますとも。——師匠の連中に始終来て下さいます。」

「あゝそうでした。あの婆さんはむかしから由良さん最負でした。」

「そうなんです。」

「久しく逢いませんし、どうしているかと思つて声をかけに一寸門^{かど}までよりしました。——と、ちょうど、二三日風邪をひいたといつて寝ておりましたが、まア上れ、まア一服のんで行けというのでこれが一時間ばかり。——体はわるくつてもいうことは元気で、仲の町の茶屋の戸袋へれいゝしく売家の札を貼ったといつて腹を立てたり、歌舞伎座から乗った自動車の運転手が山谷といったら代々木かといったといつて口惜しがったり、相手はし

やでいるところだからたまりません、それからそれ一人でそんなことを饒舌つて此方に口をきかせません。——やつとのことで逃げてまいったんですが、あのお婆さんなんでも、これ、人力や芝居茶屋と一しよに消えてなくなる玉かも知れません。」

「吉原には、しかし、あゝいう方をいつまでも……」

「と被^{おっしや}仰るのはあなたが江戸っ子でおいでだから。——いまの吉原はそんな国じゃアござんせん。」

「……………」

「これは、また……」 「うたむら」の主人は機嫌よくわらつて「では、おさきへ……」

「これは失礼いたしました。」

「いずれ、また。——そのうちに春にでもなりましたら、一度ゆツくり、機^{おり}会をこしらえてみなさんにもお目にかゝりましょう。」

「有難うございます。」

「どうぞ由良さんによろしく。——では、小倉さん、御免を……」

「……………」

小倉はだまつて頭を下げた。——小^{こおんな}女の拡げて出す黒蛇の目をうけとると、そのまゝ

「うたむら」の主人は外へ出て行つた。

「あの大将、よく来るのか、こゝへ？」

小倉は銚子の代りをいつけたあとでいった。

「うん、とき／＼来るらしい。」田代はうなずいて「あゝいう見物が大ぜいいてくれるところとも心強いわけなんだが……」

「そうじゃアねえ。」小倉は眉をひそめるように「あゝいう客ばかりたよりにしているからわるくかたまるばかりなんだ。」

「止せよ、そんな。——そんな憎まれ口は慶ちゃんにまかせて置けばいいんだ。」田代は銚子を取つて「さア、ま、熱いのゝ来るまで一つ行こう。」

「何だ、それより、急な用つていうのは？」

「いま話す。——話すから、もつと、——もつと何か喰べないか？」

「酷く気前がいいんだな？」

「いゝんだとも。——心得ているんだから、今日は……」

「大した景気だな。」

「景気だとも。——お金は小判というものをたアんともっておりまする、だ。」田代は全

くの浮れ拍子に「姐^{ねえ}や、おい、熱いのを。——それと、なんでもいゝ、親方にそういつてうめえものを……」

十

小倉はだまつてしばらく田代の顔をみていたが、

「帰^{けえ}らねえんだな、まだ？」

いきなり吐出すようにいった。

「何が？」

田代はキョトンとした顔をふり向けた。

「いゝえよ、帰らねえんだろう、この間ツから？」

「……………」

急に田代は声を上げてわらった。

「どうだ、そうだろう？」

「さア来た、熱いのが……」田代はそれにこたえず、小女の銅壺^{どうこ}から出して来た銚子をう

けとると小倉のまえの猪口と自分のまえの猪口についだ。

「あれは十五日だから、十六、十七、十八、十九、——四日じゃアねえか、今日で？」小倉はいつそ憫むように「一しよか、三浦も？」

「一しよさ、みんな。」

「みんな一しよ？——と、西巻もか？」

「金平さんが先棒をふったんだ。——慶ちゃんだつてあたしだつてそんな料簡は毛頭なかったんだ。」

「どうしたんだ、しかし？」小倉はもう一つ合点の行かないように「俺は、吾妻橋で、あすこですぐ西巻を自動車に乗せたものとばかり思っていた。」

「そのつもりだったんだ。そうするつもりだったんだ。——ところが金平さん、どうしても聞かない。——どこかでもう一杯飲もうっていうんだ。」

「随分飲んでいたじゃアねえか。——あれ以上西巻に飲めるわけがない。」

「でも、そういつて聞かないんだ。——面倒だから、じゃア、どこへでも行つてごまかせ、行きさえすれアそれで気がすむんだ。……ということになって仲見世までまた引つ返した。

——それがいけなかった。」

「……………」

「手ツとり早くと思つて洋食屋へ飛込んだ。——そこでまたうツかり五六本飲んだ。——と、今度は、慶ちゃんがガツクリ行つた。——あ、いけないなと思つたときには此方の眼もいゝ加減ちらくしていた。」

「……………」

「さア、金平さん、すっかり喜んでしまつた。——はじめの元氣どこへやら、だ。——どツかへ行こう、こう巧く顔の合うつてことはないからどツかへ行こう。——何でもいゝ附合え。——何でもいゝから俺に附合え。——かゝることもやあらんかと、ちゃんとふだんから軍費は用意してあるんだと、腹巻からこれがざく／＼札を掴み出す奴だ。」

「……………」

「で、行つたのは宮戸座の裏の待合。——まア先生しばらく……どうなすつたの、まア、その後は……といったけしきで金平さん大した扱いだ。いよく恐悅の、すっかりこれもて来い／＼になつたところへ現れたのを誰だと思う？——昼間向島で逢つた千代三郎の内儀さんだ。——驚いたよ、あたしア。——だって、君、あの女、千代三郎のまえは金平さんだつたらしいんだ。」

「……………」

「飲むんだ、また、これが猩々しょうじょうのように。——とうとう夜明の三時まで。——あくる日眼をさますと燈火あかりがついていた。——金平さんは半病人のかたちで頭が上らない。——それを無理に、いまツから帰ったつてはじまらない、もう一晚飲もう、もう一晚。——で、あくる日になると苦しい、とてもうごけない……」

「……………」

「で、とうとう四日というものぐずぐずにぶん流しの……」

「よく心細くなかったな？」

「ずけりと小倉はいった。」

「何が？」

「ふところがよ。」

「心細かったよ。——何としたって、君、慶ちゃんと二人の総財産金三円五十銭也だ。」

「知ってるからよ、それを。」

「いくら金平さんが心得ているにしたって、これ……」

「どうした、それで？」

「仕方がない、お詣りと称して外へ出の、チョコ銀へ駆けつけた。」

「チョコ銀へ？」

「いやな奴だけど、また、そういうときは調法だ。」

「どうした、そうしたら？」

「それが——それがまた不思議なことに。」田代は声を落して「さアさとばかりいとも器用に。——そういつても洩らずに……」

「出したか？」

「出したにも何にも。——大した御機嫌で入るならいくらでも持って行け……とまでいわなかったが……」

「で、いくら借りた？」

「百円。」

「……………」

「で、まだ、そっくり半分残ってる。——入るなら貸すぜ。」

「誰が借りる、そんな金。」

「どうして？」

「お前、それを何の金と思うんだ。」

「何の金と？」

「そうよ。」

「……………」

ふつと田代は小倉の顔を見た。——なぜならその小倉の言葉のなかにたゞならないものが感じられたから。——弁天山の鐘の音の落ちかゝるように響いて、戸外そとのみぞれをまじえた雨はいつか雪になっていた……

冬至

一

……三浦と田代にわかれてうちへ帰ると一しよに西巻は病人になってしまった。そのまゝ

ずっと寝込んでしまった。――要は飲みすぎ……連日の暴飲がたゞつたには違いないが、一つには、そうでもしなければ家のものゝ手まえ恰好のつき兼ねるものがあつた。――實際、西巻は、女房のまえに、何とそのふしだら言訳をしていゝか分らなかつた。はつきりいつて女房や子供に合せる顔がなかつた。友だちとの附合。……そういうにしても四日は長すぎる……

「何だつて、俺は……」

たゞもうかれは悔まれた。思案すればするだけ自分のだらしなさがはつきりした。切上げかけてはもう少し。……器用に、じゃア、もう一杯飲んで。……いま歸つたつて明日^{あした}歸つたつて歸る味はおんなしだ。……みすく早く引上げることの出来たものをそういつて一日延しにのぼしたのは三浦でもなければ田代でもなかつた。――みんな自分……なかで一ばん年嵩の自分だつた……

「酒なんぞ飲んでどこが面白いんだ。」

歎息するようにかれは自分にいつた。――實際そうだつた、實際かれには酒の有難さが分らなかつた。三十年来、酒といえは西巻、飲むことゝいえは金平さん。――天下の酒飲みと人も許せば自分でも信じて来たものゝ……そう信じてめくら減法飲みつゞけて来たも

の、ほんとうに俺という奴は酒が好きなのかしら？——とき／＼そうわれとわが胸に質^{ただ}してこたえにつまることがある。——でも、むかしは、すくなくもまだ五年まえまでは、好きだから飲むんじやアねえか、分り切った話じやアねえか。……苦もなくそういつて蹴散らすことも出来た。論より証拠この通りと、そんなキザな、ろくでもないうたがいを晴らすため無理からな^{あお}お呷りつけることも出来た。——早い話が、この間でも、自分からみればまだ子供のような田代の、いかにもおろそかでなく、いかにもたのしみそうに、いかにもうれしそうに、しずかにそのいち／＼の猪口^{ちよく}を口へ運んで行くさまをみて、いまさらのように自分の、飲みさえすればい／＼といった工合の、たとえばさ／＼れた猪口でもずん／＼そばからあけて行くいわれなさをわれながらつく／＼あさましいと思った。——あげく誰よりもさきへつぶれたかれたった……

「止せよ、おい、そんなに無理に飲むなよ。」

むかし、よく、鷺尾にそういわれた。あの「仙人」はそういつてはよく介抱してくれた。あの男は、あの時分から、自分のほんとうの飲み手でないことをちゃんとそう知っていたのかも知れない……

「が、それにしても弱くなつたもんだ。」

歎息するようにまたかれは自分にいった……

二

酔うことは酔った。酔うことはむかしだつてすぐ酔った。もつといまより以前の^{むかし}ほうが輪をかけてよけい酔った。——が、酔つても、いくら酔つても正体をなくすということはなかった。——どんなにべろくになつても行きつくところまでは必ず行きついた。——いかにへたばつてもいざとなればすぐ立直れた。——その一ばんいゝ証拠はどんなに深く飲んだときでも、どんなに長いくさをつゞけたときでも、決して人のように、そのあと体がつかえない。——そんなことは決してなかった。「失敗^{しくじ}ったかな、此奴^{こいつ}？」と、ときにそう感じられることがあつても、起きぬけにすぐ熱い湯に入り、ぐツと一つそのあとで熱い奴さえ引ツかければ、立^{たちどころ}所に、奇妙な位立所にケロリとした。そうして、あと、いくらでもまたつゞけられた。——それほど怯^めげないかれだつた……

「強いんだなア、金平さんは……」

大ていのはそれをみたゞけで感心した。

「不死身なんだね。——つまりはそうなんだね、俺は。」

それに対して、かれは、そういつてはつねに頤あごを撫でた。そうしてそれを……誰もそれをほんとうに思った。

が、四十という声のかゝる前後からだん／＼その不死身があてにならなくなって来た。そうして五十という声のいよ／＼聞えて来たとき、いつかかれは飲むとすぐ眠くなるくせがついていた。文字通り前後不覚になるくせがついていた。ともすると二日酔いの、一日ですまず、ずっとそのあくる日まで持越すといった風なくせがついていた。——勿論そうなつては、熱い湯も、熱い奴も、却つてその苦患くげんをはつきりさせるばかり、決して以前のようないやちこな験げんをみせなかった。そうしてその前後から、根こんがなくなり、のみこみが悪くなり、気にすべて張りがなくなり……身の衰えが急に押して来た。側からやい／＼いわれて医者にみせると腎臓に故障があるといわれた。いまのうち養生をしなければ。……ということはいうまでもなく禁酒の勧告をされたのだった。

が、かれは肯うべなわなかった。強情にかれはそのいわれなさを主張した。——が、たま／＼そのとき、一座のうちでかれにつぐ飲み手とされていた大部屋のある男が、ある日、突然血を吐いて倒れた。それが酒から来た胃潰瘍。——そうした不治のやまいのわざと聞いて

ひそかにかれは慄然とした。——即日かれは医者^の勧告に従った。

「が、何だぜ、やまいが怖くって俺ア酒を止めたんじやアねえんだぜ。——病煩いなんぞ俺ア氣にするんじやアねえぜ。——たゞ正坊が——正坊が可哀いから俺ア止めたんだ。——

——正坊が中学へ入る^{へえ}つていうのにいつまで親父が……いつまでそんな親父が飲んだくれてばかりいられる？——それを思つて俺ア止めたんだ。」

かれは真面目な顔で負惜しみをいった。

が、その禁酒は三月とつゞかなかつた。いつともなしネジはもとへもどつていた。——
すくなくもその正坊のめでたく中学の試験のうかつたとき、有頂天になつたかれは、すぐ
にその晩、仲間を大ぜい呼んで来て、たゞもう夢中にその晩一晚飲明したことだけはたしか
だつた……

三

「すつぱり、しかし、あのとき止めてしまつていたら？」死んだ子の年どとき／＼そう
未練におもひ返されることがあつた。「つまりは……つまりはそれもチョコの奴にのせら

れたんだ。——彼奴^{あいつ}にうまく嵌^はめられたんだ。」

おもい返す都度、かれは、菱川をうらんだ。彼奴さえよけいなことをいわなかったらとかれは口惜しがった。——よく止めた。よくおもい切つて止めた、さすがは金平さんだと楽屋でみんなそういつてくれたのを……名物のなくなつたのはさびしいが、そのほうが身のためだ、よくその氣になつたと無暗にそうものゝ善悪をいわない筑紫までがそういつてくれたのを、その中で、菱川だけ安く鼻であしらつた。

「酒を飲まない西巻なんてものは氣の抜けた風船だ。——役に立たねえつてこれほど無駄なものねえ。」

かげでそうせゝら笑つたと聞いてかれはカツとした。「よくも、畜生。」とかれは唇を噛んだ。そうでなくつても涸^{しほ}んでゆく……そのため日にくゝ氣の屈して来る、料簡のしゅんで来る、世の中のつまらなくなつて来る自分を心細くみ出しかけたかれである。——かれにすると、だから、最も痛いところにそう触られたのである……

が、もし、それが筑紫なりだれなりの口から出たのだつたらそうは思わなかったかも知れない。いつそ却つて有難いうれしい台詞にうけとつたかも知れない。「氣の抜けた風船……」かれのいかにも喜びそうな文句だった。——が、菱川がいったのでは……天下にか

れの最も気に食わない菱川のそういったのでは金札でも鉄札……飲めばいゝんだろう、飲んだら不思議はねえんだろう。——ついてそう不貞腐れもいわざるをえなかった……

「あいつ。——どこまでたゝるんだ、彼奴……」

と、いまさらのようにそのだらしなく酒を飲みはじめたそもく、……飲んどくれることを覚えたそもく。……そうでもない限り、客の座敷で、始終菱川にけじめを喰い通しだった二十年まえのことがさびしくおもい出された。——と、そのおもいではまた、最近の、ついその一月まえの本郷の芝居の舞台での歪んだ互いの心もち。——二十二日の間、たゞの一日もその両方の呼吸いきのしつくりしなかった不愉快さをさらにそこへさそい出した。それはかれにとって久しぶりについた好い役だった。仕出し同然の端役はやくではあったが眼につく役だった。演りようによつてはいくらでも儲けることの出来る役だった。いさんでかれは稽古に入った。一つ久しぶりにと大反跳おおはすみにかれははずんだ。——が、その相手になる菱川は、たとえば正月の万歳の、かれの役を才蔵とすれば、当然片っ方は太夫のイキで行かなければいけないのはじめから捨てゝかゝった。いくらかれが工夫してかゝつても決して菱川はそれに応じなかった。——それどころかわたす台詞さえまんぞくにうけとらなかった。——いくら此方がヤキモキしても相手は平氣だった。

で、結果は散々だった。当然うけるべきものが根っからうけなかった。うけないばかりでなくむしろ不評だった。いつもかれに同情をもつ新聞の劇評にさえ「菱川、西巻、ともに当年のおもかげのないのは寂しい。」と、みごとに匙を投げられた。

「畜生。——菱川の畜生……」

かれは、うそもかくしもなく、その劇評を見て口惜し涙をこぼした。

四

……で、その五日ほどの間に、かれは、うそのようにげつそり^{やつ}裏れた。どんな長煩いでもしたあのように自分にもそうトボンと感じられた。それほど、かれは、その寝ている間、身もこゝろもいためつづけた。わけもなくかれは、寂しく、味気^{あじき}なかった。奈落の底へでも落ちたように心細かった。どこを向いても、くらがりの、光りというものゝさして来ない、とりつき端のない感じのなかについぞいまゝで洒落にも思ったことのない一生……大切なその二度と返らない人の一生……そうしたことがいまさらのように果敢^{はか}なくふり返られたりした。

「馬鹿だなア、俺は……」

強いてかれは自分にいった。――勇氣を出してわらおうとした。――が、駄目だった。
――笑えなかった。――逆に、眼の中に、なぜとも知れない涙が浮んで来た……

「年だ。――つまりは年だ……」

そう思うと、泪のひまに、女房や子供の……自分だけをたよりにする女房や子供のいとしいすがたが眼さきに浮んだ。

「が、もしものがあつたら？　――俺に、いま、もしものがあつたら？」

不意にかれはうしろから羽交^{はかい}じめにされた。――いそいでかれはふりほどこうとした。

――が、それは、かれの自分でつけた立廻りの手のように器用にそうは行かなかった。――
――ずる／＼とそのまゝ惨めにかれは引戻された。――どこまでも引きずられた……

「止める。――今度こそきつと止める。」かれはふかく誓った。「誰が何といったって――
――誰が何といったって今度はきつと止める……」

……が、急に、……急にそうかれのこと／＼く氣落のしたのは、からきしくじのな
くなつたのは、一つには、今度のふしだらについての女房の仕向^{しむけ}のあんに相違するものが
あつたからだつた。三日も四日もだまつてうちをあけた亭主に対する女房の仕打と思えな

いものがあつたからだつた。——そういつてもかれは、優しく、機嫌よくうけとられた。——そういつてもかれは、容易に、無事に、安穩にわが家の^{しきい}閨をまたぐことが出来た。嶮しく青褪めた顔、冷かな氷のような言葉、邪慳な鋭い針をもったとりなし。……武者ぶりつき、噛みつく代りのそうした^{しもと}答をその身に決して感じなかったのだ……
いえばかれは拍子拔がした。

……かれは、すぐ、言葉すくなにいいつけて床を取らせた。言葉すくなにいいつけて薬を持って来させた。——帯を解くなり吉原つなぎの羽二重の長襦袢のまんまかれはこうがするように横になった。

「苦しいんですか？」

「うん。」

「お医者さまを呼びましょうか？」

「うん。」

いそいでかの女は枕許を立てて行つた。

「すまねえ。——すまなかつた……」

かの女の足音の階子段の下へ消えて行くのを聞きながら^{かいまき}搔卷のかけで密にかれはこう

いった。——柳橋で稼しやうばい業ぎやうしていた時分のかの女のすがたがはつきりかれのまえに返つて来た。——おもえば苦勞し合つた仲である……

ちようどその、「菊の家」で田代が鯛チリの鍋をひかえて一杯はじめた時分。——八丁堀の空にも雨はふっていた。……みぞれをまじえたその雨がかれの耳にも冷々と音を立てゝいた……

五

が、あの日のビショ／＼したけしきに引替えて何という今日は馬鹿な天氣だろう。真つ青に晴れた空、うら／＼とした明るい日影。……おかげで料簡がカラツとする。——かれは床の上を離れて窓のそばに立った。そうしてみるともなく外の光景けしき……バラックの屋根とラジオのアンテナとの錯綜のかぎりなく打続いた光景……でも、それは、かれの二十何年というものそこに住みつゞけた馴染のふかい町々のうえをみ渡した。大通りからやゝはずれた新みちのなかだから電車の音も響いて来ない、自動車の音も聞えない。……しずかに晴れたその青空の下に、そのとき、一文いちもん獅子ししの太鼓の音が遠くさびしくたゞよっていた。

かれは窓を閉めて床のうえに返った。いそいでかれは手を叩いた。――返事がないとみ
ると「おます、おます……」とかぶせてまた大きな声で呼んだ。

「御用で？」

唐紙をあけて顔を出したのは書生の西崎だった。

「おますはいねえのか？」

「一寸いま買物にお出かけになりました。」

「正ちゃんはどうした？」

「先刻さっき学校のお友だちのところへ行くといっておでかけになりました。」

「と、誰もいねえのか、階下したに？」

「へえ。」

「何時だ、いま？」

「もう少しまえに三時をうちました。」

「三時を？」

「へえ。」

「湯に行くからすぐ支度しねえ。」

ふいとかれはこういつて寝巻——長襦袢は、あの晩、医者^の来たあとですぐ脱いだ——のヒラグケをしめ直した。

「へえ？」

西崎は自分の耳を疑うように訊きかえした。

「湯に行くから石^{シャボン}鹸や何か階下へ出しときねえ。」

「しかし……？」

「早くしねえ、早く……」

西崎の何かいいかけるのを押えるようにかれは立上った。枕許のお召の丹前を取って寝巻の上に引ツかけた。——それを見ると西崎は狼^{あわ}狽^わて、階下へ下りて行った……

かれは手拭を下げて外へ出た。あらためてその真つ青に……青く冷めたく水のようにそういうっても美しく晴れた空をみ上げた。……と一しよに、かれは、いつの間にかそのあたりの、眼に触れるすべてのものゝいそがしくすでに年の暮の粧いをしているのに気がついた。——おもいなしに往來をあるいている人たちでも浮足立って感じられた。——大通りにはすでに春を待つ笹の影さえつゞいていた。

「お湯ですか、先生？」

うしろからかれは声をかけられた。

「えゝ？」

ふり向くとそこに、近所の鰻屋の、芝居の好きな出前持が立っていた。

「おう、金公……」かれは愛想よく「どうだ、いそがしいか？」

「だめですよ、もう、こゝへ来ちやア。」

「だめだ？——生意気いっていやアがる。」

「生意気じゃありません、ほんとうですよ。」

「そうだ、ちょうど好かった。」ふいとかれは思いついたように「あんまり荒くないところを三人前に、どんぶりを一つ、あとで家へとゞけてくれ。」

「荒くないところを三人前にどんぶりを一つ？」

「そうだ。」

「かしこまりました。」

出前持にわかれて間もなくかれは湯屋のまえに立った。

「『今日柚湯』——そうか、今日は冬至か？」

つぶやくようにいつてかれは入口の戸をあけた。

六

……日の短い頂上である、ガタリと急に、わずかな間に、日かげも褪せ、空のいろも艶をうしなった。——で、いつになくかれのおちついてゆつくり柚湯につかり、さばくした、生返った……同時にやゝぐツたりした恰好で外へ出たとき、いつかもうあたりは、灯^ほ影^{かげ}の、濃く、しめやかに、眼立しく感じられる程度に……そのくせまだ空はさえ／＼とあかるく……たそがれていた。ほてる頬に触れる空気のしずもりをたのしむように出来るだけかれはぶら／＼あるいた。

「まア、お前さん……」

格子をあけてうちへ入るなりいきなりかれはおますにいわれた。「いま西崎をみせにやろうと思ってたところじゃアありませんか。」

「どうして？」

「どうしてってそうじゃアありませんか。——わたしのいない留守にだまってお湯になんぞ……」

「そんなこといったつていつ帰るか分らねえものを。——ぐず／＼していたら日が暮れる。……でなくつても、みねえ、あの時分に出たつてこのさまだ。」

「何もそう急に行かなくつたつて。……行くなら行くようにお医者にも訊いて、お医者がいゝといつたらそれから……それからだつていゝじゃアありませんか。——いゝえ、いゝじゃアない、そうしなくつちやアいけないんですわ。——ほんとうに快くなつたのかどうか分らないんじゃアありませんか、まだ？」

「快くなつたのよ。——すっかりもう快くなつたのよ。だから湯にも入つたんだ。」

「自分でそう勝手に決めたつて。——もし、また、そんなかるはずみをしてぶり返しでもしたらどうするんです？」

「ぶり返すなんて、そんな。——そんな大したこつちやアねえんだ。——それほどの病人じゃアねえんだ。」

「そんなら、じゃア。——いゝえ、それだからいけないんですよ、あなたは。——お医者が何といたつたと思うんです。」

「医者が？」

「すこしはもう自分の体も思わないじゃア。——いつまでそう若くつておいでじゃアない

んだから……」

「床上げをするんだ、床上げを。」おもわずヒヤリとしたかれはそういつてそれをごまかした。「いま伊豆屋の出前持にそういつてやったから鰻が来る。——すぐに、だから、膳の仕度をしねえ。」

そのまゝ、かれは、手拭と石^{シヤボン}鹼を西崎にわたして茶の間へ入った。金^{こんじん}神さまのまえに一寸手を合せ、すぐに長火鉢のまえの、友禅の大きな蒲団のうえにすわった。——たッぴつに惜しげなくついだ備長の匂があかるい燈火のなかにうごいていた。——かれは沸^{たぎ}つた鉄瓶の湯を湯呑についでうまそうに一口飲んだ……

「唯今……」

そこへ正太郎が外から入って来た。「あ、起きたんですか、お父さん？」

「うん。」

「直ったんですか、もう？」

「直った。」

「大丈夫なんですか、ほんとに？」

「大丈夫だ、ほんとに。」

マントを脱ぎながら懸念そうに立った正太郎からかれは眼をそらした。——人こそ知らね、そらしたそのかれの眼にキラリとそのとき泪が光った……

七

間もなく長火鉢のそばにチャブ台がひろげられ、おますが西崎を手伝わせ、そのうえにならべる夕食のしな／＼を広蓋にのせて運んで来た。——とも／＼、かれも、茶箆筥をあけて箸箱を出したり、鉄瓶を下ろして茶を焙じる仕度をしたりした。

「あ、そいつ。——入らねえんだ、其奴……」

いつものように、おますは、最後に自分も火鉢のまえにすわって、はる／＼嘗て大阪の鼯負からとゞけてよこした錫のちろりを銅壺のなかへしずめようとした。——それを見ると狼狽^{あわ}てゝかれは……いそいでかれは押留めた……

「……………」ふいにそういわれておますはかれの顔をみた。『どうしてゝす?』

「飲まねえんだ。——飲まねえんだ、俺ア……」

「飲みたくないんですか?」

「そうじゃねえ、飲まねえんだ。」

「……………」

「止めたんだ。——止めたんだ、俺ア。」

「急にまた……」おますはわらって構わずちろりをしずめた。「駄目ですよ、そんなこと
いったって……」

「なぜ。——なぜだ？」

「止められやアしませんよ、いまさら。——うだけ無駄ですよ、そんな……」

「どうして？——どうして無駄だ？——お前でも、先刻さつき、すこしは体を思わねえじゃ
ア。……そ、そういったじやアねえか？」

「いいましたわ。——でも、それは、お酒のことをそういったんじやアありませんわ。」

「じやア何のことをいったんだ？」

「何のことってことはなく、いろく。——すこし調子に乗るとすぐ羽目をはずすんです
もの、あなたって人は。——それがいけないんです。——すぐそうがむしやらになってし
まうのがいけないっていうんです。——お酒だって、うちで、一本なら一本、二本なら二
本、定めてちゃんと飲む分にはちツともそんなかまやアしません。——薬になるったって

毒になりつこありやアしないんですわ。」

「……じゃアねえ、そうじゃアねえ。」かれは固く執つて「どう間違つたつて薬にはならねえ。——毒だ。——しみ／＼分つたんだ、毒だつてことが。——一口飲めば一口だけ

……すぐもうそれだけいけねえんだ、わりいんだ。……それアもう覲^{てきめん}面だ。」

「でも、あなたのような人は……あなたのようないまゝでお酒浸しになつて来た人は、急にそう止めたりなんかすると却つてそのほうがいけないんだつていいいますわ。——そればかりでなく、お酒をたくさん飲んだ体は、お酒の気が切れると、いざどこが悪いとなつたつてそのまんまじゃア薬だつて効かないつていいいますわ。」

「そんな……そんな馬鹿な。」かれは頭からわらつた。

「いゝえ、そうだつていいいますわ。——お医者がそういいましたわ。——ねえ、正ちゃん

。」おますは怯まず正太郎をふり返つて「そういったね、この間、山地さんが？」

「そういつた。」正太郎はハッキリうなずいて「お父さんは飲んだほうがいゝ。——飲まないところの元気がなくつていけない。」

「元気が？」そういう正太郎のほうをかれはみた。

「そうですよ、ほんとうに。」その尾についてやゝ詰^なるようにおますはいつた。「お酒を

飲まない、このごろ、へんに陰気な顔をして。——こまりますよ、いまツから……」

八

「そ、そんなこたアねえ。」

いそいでかれはそういつた。——が、それと同時にかれは、いい解くすべを知らない寂しさに身うちを引きしめられた。たとえば八幡やわたの藪知らず……その藪の真つたゝなかの、どっちへ行つてもふさがれた行くてゝある。——ぼんやりそこに立ちすくむ外はなかつた……

「床上げだ。——床上げの祝だ。——じゃア、まア、今夜だけは特別だ。」すぐかれは猪口を取上げて「明日から——明日からきツと止める。」

おますは銅壺からちろりを出した。

「つきましたよ、お燗が……」それにこたえず、底へ手をあてゝ加減をみると、火鉢越しにはじめの一つだけ酌をした。

「さ、喰べねえ、正ちゃん。」そのまゝかれは猪口をふくみながら正太郎のほうを向いた。

「どツか前川へでも久しく行かねえから連れてつてやろうかと思つたんだけど、こつちが寝込んだじやつたもんでそう行かなくなつた。——春になったら連れて行く。——どこへでも好きなところへ連れてつてやる。——だから、まア、今年はそれで負けといてくねえ。」

「えゝ。」

そうこたえたゞけで正太郎は、すぐその蒲焼の蓋をあけて皿にそれを取り分けた。

「おます、お前も喰いねえ、正坊と一しよに。——冷めねえうちに早く喰いねえ。」

「えゝ、喰べます。」

「西崎、お前にも今度は心配をかけた。——だからお前にも御馳走してやる。……そのどんぶりをそつちへ持つてつて勝手に喰いねえ。」

「は……」

「あゝ、久しぶりで手めえの体になつた気がする。——どこへ行つてもしかしわが家ほどいゝところはねえ。」

猪口を下に置くとぐツと一つえりをしごき、出来るだけかれは晴れやかにとりなしてみせた。

「それだけ矢つ張年をとったんですね。」

わざとおますは冷かにいった。

「そうなんだ。——全くそうなんだ。」すぐかれはうなずいて「一人でいるときにはさほどにも思わねえが、田代なんぞと一しよになるとしみ／＼」そう思う。——ばかりしくつてあいつらのすることなんぞみちやアいらねえ。——ほんとうだぜ。」

「だって、それは、あなたの田代さん位の時分を思ったら……」

「そうじやアねえ、そんなことをいうんじやアねえ。」いそいでかれは遮って「俺のいうのはだん／＼俺も年をとって来た、いま／＼でのようなちよろツかなことはやつちやアいらねえ。いえ、それだけの味を舞台にも持たせなくつちやアいけねえ。……そういうんだ、つまりは。——田代にも三浦にもそれをいった。田代も三浦もその通りだといった。——そこで一つさえ返つてもう一度／＼で西巻金平を売ってみると二人もそういうんだ。」

「と、矢つ張……?」

ふいとおますは言葉を挟んだ。

「えゝ?」ちろりを取上げようとした顔をかれは上げた。

「ほんとうなんですか、矢つ張、あの新聞は?」

「新聞？」かれは解^げせない顔をした。

「えゝ、この間の……」

「出ているのか、何か？」

「今度のことが、あなた……」

「今度のこと？——何だ、今度のことっていうのは？」

「いゝえ、今度の由良一座の解散した……若宮さん座^{さがしら}頭の一座の新規に出来た……」

九

「何だつて？」思わずかれはおますの顔をみた。「由良一座が解散した？」

「えゝ。」

「で、若宮が座頭だ？」

「えゝ、若宮さんを座頭にしてあとはいまゝでの由良一座の重立った人でかためた一座が出来る。——で、ちゃんと、筑紫さんの名前も出ていれば神^{こうじろ}代さんの名前も。——小倉さんの名前も、三浦さんの名前も、田代さんの名前も出ていました。」

「と、じゃア、俺の。——名前も……？」

「いゝえ、入っていません。」

「入ってねえ？」

「『矢の倉』の先生と、汐見さんと、あなたと三人の名前だけそのなかにはいません。——だから、わたし……」

「菱川はあるのか？」

「ありました、ちゃんと。」

「……………」

「菱川さんの名前がなければ、これは、あなたと二人だけは矢つ張『矢の倉』の先生のところに残る。——そう思いますわ。——けど、菱川さんの名前の出ているのにあなただけ。」

——汐見さんは活動のほうへ行くんだというし……」

「そんなことも出ているのか？」

「えゝ、それは外のところに……」

「そ、そんな籠棒な……」 急にかれは遮るようにいった。 「何新聞だ、そんな。——あるか、その新聞？」

「あります。——とつてあります。」

「みせねえ。——持つて来てみせねえ。」

そういうと一しよにかれはちろりを取つて猪口のなかをみたした。そうしていそがしくそれを口へ運んだ。——と、そのとき烏賊^{いか}の墨のようなものが急に身うちにひろがつた：

：

そこにまだいた西崎が立つてすぐそれを持つて来た。

「どこへやった、眼鏡？」かれはいつもそこへ入れて置く火鉢の抽斗を掻きまわした。

「入っているでしょう、そこに？」

「入つてねえ。」

「そんなことないでしょう？」

「……あつた。」すぐまた不機嫌にそういつて眼鏡を……みツともねえ、だらしがねえ、いまツからそんな外聞のわるいことが出来るものかと長い間強情を張りぬいたあと、とうとう負けてこの冬からかけ出した老眼鏡を出してかけ、いそがしくまたかれは新聞を取上げた。

……その通りだ。おますのいう通りだった。いよく今度、長い間の縁が切れ、会社の

手を離れて独立することになった新派は、それを機会に従来の由良一座を解散し、新たにそこに若宮柳絮^{わかみやりゆうじよ}を盟主にした清新な一座の組織されるにいたったこと。——そうする上には従来新派の癌とされていた諸種の情実だの因襲だのを根本から芟除^{せんじよ}すると同時に、この際、女形制度を廃して女優を活用すること。——それには関西のある若宮勲負の金持がうしろ立になって、来春^{そうそう}匆々、東京の某大劇場で花々しく旗挙をするに決ったこと。……そうしたことを長々と書立てた大袈裟な特別記事だった。

かれは日附をみた。十七日としてあつた。十七日といえば……十七日といえば二日目である。飲んだくれていた二日目である。……そんなことゝは夢にも知らずうじゃじゃけ放題うじゃじゃけていた最中である。

十

が、それにしても三浦や田代はそれを知ってたのだろうか？——知ってゝ黙っていたのだろうか？……

会社と手が切れた。みんなもう会社をクビになった。……はじめの晩、そういえば、

「菊の家」でもあとの洋食屋でもしきりに三浦はそうしたことをいつていた。——そんなことがあるもんか、そんな馬鹿なことがあるもんかと、田代と二人、意地になってそれをやり返した。昼間もいゝえ、向島で、小倉と三浦にそういわれて心細くなつた。……田代はそういつた。……何だ、金平さんも知らないのか、金平さんでも知らないことか？——そんなら安心だ、そんならえばつたもんだ、つまらないことをいつて余計な心配をさせやアがる。——急にそう田代は氣を強くした……

とすれば……してみれば田代は知らないんだ。知らないに違いないんだ。知つてゝそんな芝居の出来る男じゃアない。——そういえば三浦だつてそんな男じゃアない。——なるほど理窟はいう、筋はいう、にくまれ口はきく、が、三浦は、肚はごく綺麗なものだ。菱川のような下手なすいのうばりじゃアない。——もし知つていれば、会社と縁が切れたとはツきりいつたくらいだ、そのうえのことだつてはツきりそういつたに違いない。——いわないのは……それをいわないのは知らないからだ……

田代も知らない、三浦も知らない、小倉だつて知らない。……その知らない三人の名前が出てゐる。——本^{ほんぎま}極りのように立派に出ている。——うそだ。——でたらめだ。——
おおよた
大与太だ……

かれは投出すように新聞を下に置いた。鬱陶しそうに眼鏡を脱^とつて火鉢のねこいたの上に置いた。——が、そうは思つても……うそだ、でたらめだ、大与太だ、そうは思つても先^{さつき}刻ひろがつた身うちの烏賊の墨のようなものは決して退^ひいて行かなかつた。——あれほどあかるく晴れていた心の青空にいつか深く雲がまわり切つた。——一二時間まえのあの手拭を下げてのうくと外へ出た自分、鰻屋の出前持に声をかけられて機嫌よく口をきいた自分、柚湯のなかでのびくと手足を伸ばした自分……そうした、その、何にも知らない、いゝ気な、可哀想なおのれのすがたがいまさらのように惨めにおもひ返された……

「若宮さんが、しかし……？」 さぐるようにおますはかれの顔をみた。

「……………」

だまつてかれは冷えた猪口を取上げた。

「だれもそう側にいなくなつて……どうなさるんです、『矢の倉』の先生は？」

「そんなまだはツきりしたことじゃアねえんだ。——決つた話じゃアねえんだ。」

にべもなく、かれの、はき出すようにそういつたその言葉のかげに救うことの出来ない心弱さがありくかくれていた。——かれはちろりを取上げていそいでまた猪口を一ぱいにした。

「……が、だれがいなくなつたつて俺はいる。——俺だけはそばにいる。」

すぐに言葉を継いで半ば自分にいうようにかれはいった。——と一しよにかれは目蓋のうらの熱くなるのを感じた。

「おい、つけてくれ、あとを……」

……遠く霜にひびく火の番の金棒の音。——更けることの早い冬の夜である。

むほん

一

……これよりさき「菊の家」で「お前^{めえ}、それを何の金と思うんだ？」とだしぬけにそう小倉にいわれて驚いた田代は、そのあと、由良を捨て、若宮の独立する。……由良一座に代つて若宮一座というものが出来る。……そうした魂胆^{こんたん}の、そうしたむほんの企ての着

々運ばれていることを聞いてさらに一層おどろいた。——しかもその若宮一座の顔づけのなかに自分も入っている、ちゃんともう自分の名前も一枚入っていると聞かされるに及んでいよく／＼かれはおどろいた。——驚いたというよりあつけにとられた。

「戯じよ、戯談じようたんだろう。——戯談だろう……」

それがくせの、たゞその「戯談だろう」をくり返すだけだった。

「だって仕方がねえ、先方さきでそう決めているものを……」小倉はわざと冷かにいった。

「ちゃんともう新聞にまで出ているもんだ。」

「新聞にまで？」

西巻でも知らない位である、田代の知るわけがない……

「みねえのか、あれを？」

「みやしない。——そんなものみやしない。」

「迂闊な奴だ。」

「だって。——だって、それは。——たとえば新聞に出たって、それは。——乱暴な、——

そんな乱暴な……」

「どうして乱暴だ？」

「そうじゃアないか、乱暴じゃアないか。……本人の承知もしないものを勝手にそう……先方ばかりそう……」

「しらねえことがあるもんか。——ちゃんともう承知しているんじゃアねえか。」

「戯、戯談だろう。——そんなことがあれば……うそにもそんなことがあれば君にだって慶ちゃんにだって相談するよ。……だまってそんな不人情な真似はしないよ。」

「そんなことをいつて、お前、手金まで取つたんじゃアねえか。」

「手金まで？」

「そうじゃアねえか。——しかも、お前、年尾くれの金で百円……」

「百円？」

「まだ残っているはずだ、半分……」

「な、なにをいやアがる。——それはチヨコ銀に……」

「だから借りたんじゃアねえか。——たしかにそうなんじゃアねえか。」

「そうさ。——それはそうさ……」

「チヨコがしかし、そんなあてのねえものを貸す風か？」

「あての？」

「みとめのつかねえ金を器用にそう出す奴か？」

「……………」

「だからいうんだ。——お前、それを、何の金だと思うんだ？」

「だってさ。」

「チヨコの仕事なんだ。——大体今度のその仕事っていうのが菱川信夫のさりやくなんだ。
」

小倉はずけりとそういった。

二

が、田代は、にわかになんかそれを肯^{うべな}わなかった。

「だってチヨコが？——可笑しいじゃアないか、それは？」

「どうして？」

「それは、あのじい、慾張つちやアいる、こすツからくは出来ている。……随分、ふてえ、小癪に障る、それこそ人の小股をすくうようなことばかり始^{しよつちゆう}終^{しちやア}しているが、

もと／＼そんな悪党じゃアない。——そんな大それた真似の出来る大百じやアない。
 「そうよ、大百じやアない。……そんな大百でないだけチョロリ人に乗せられる。——搔か
 出され／＼ばすぐその気になる。」

「だって、そういったって、それじゃア『矢の倉』の先生に弓を引くもんじやアないか？」
 「そうさ。」

「そんな——そんな義理を知らない……何年附いているんだ、先生のそばに？」

「うぬの命の鰐つばぎわ際にやア主の首まで打つじやまで、だ。」

「えゝ？」

「いざとなれば先生より手めえのふところのほうが可愛いのよ。」

「しかしそれは……それは君だの慶ちゃんだのならいゝ。……いゝってことはなくつても
 まだ堪忍が出来る。——譜代じやアないんだから。——つまりは外様なんだから……」

「またはじめやアがつた。」

「いゝえ、ほんとうに。——けどチョコはそうじやアない。——それじゃア、チョコはす
 まない。——そんなことを金平さんに聞かせたらどんなに腹を立てるだろう？——でな
 くつてもあいつは薄情だ、不人情だ、先生、先生と前へ出ると匍へえつくばっているくせに、

かげへまわると『矢の倉』の、由良君のと、いま、で三十何年厄介になって来たことを何とも思わねえ面つらをしやアがる。——あんな太え罰ふてあたりはねえ。——始しよ終ちゆう金平さんは
そういつているんだ。」

「だから、お前は引つ張つたつて西巻は引つ張らねえ。」

「と、誰を引つ張るんだ、一体？——新聞には誰とだれの名前が出ているんだ？」

「みんな出ている。」

「みんな？」

「汐見君と西巻を抜いたあとのものはみんな出ている。」

「神代君もか？」

「あの男は稼げさえすればどこへだつて行くんだ。」

「と、君も慶ちゃんもか？」

「御多分にはもれねえ。」

「そんなことをいつたら、君。——それじゃア、君、由良一座はナシじゃアないか？」

「だから由良一座の代りに若宮一座が出来る。——はじめッからそういつてるじゃアねえか？」

「したら先生はどうするんだ？——『矢の倉』の先生はこのさき誰と芝居をするんだ？」

「誰も相手がねえのよ。」

「そ、そんな——そんな——そんなってことがあるものか。」

「俺にそういつたって仕方がねえ。」

「いやだ。——いやなこった。——誰がそんな……」

「俺だつていやだ。」

「じゃアなぜ承知した。——いやなものをなぜ承知したんだ？——あたしア知らない。

——あたしやア何にも知らないんだ。——けど君は知ってるんじやアないか、それほどちやんと事のしだいを知ってるんじやアないか？」

三

「誰が承知なんぞするものか。」

ずけりとまた小倉はいった。

「しない？」

「するものか。」

「だって、君。」田代は出鼻をいなされたかたちに「どうして？」

「先方^{さき}だけで勝手にそうきめているんだ。」

「じゃアおんなしじやアないか？——おんなしこつちやアないか、あたしと？」

「でも、俺は、お前の^{めえ}のようにそんな手金なんぞ取つちやアいねえ。」

「返しやアいゝんだろう、返しやア……」

「うけとると思うのか、チョコが？」

「うけとらなくつたつてうけとらせる。——此方^{こつち}はそんなつもりで借りたんじやアないんだから。」

「そこがむこうの思う壺だ。——先方^{むこう}からわざゝ足を運んで、もしうんといつてくれゝば、いまゝで御用立したものは綺麗にこゝで棒を引く。——まずそれがさし当つての御相談。……そういつて来る奴を、逆にそつちから、すみませんが一つ。……頭を下げてさきのふところへ飛込んだ奴だ。——チョコにしたら、何のことはねえ、喜んでくらしいつて来た……」

「そ、そんなことをいつて行つたのか、君のところへは？」

「俺のところばかりじゃアない、ほう／＼その手で口説いてまわったんだ。」

「畜生！……そんなことこれッばかりもいやアがらない。」

「あたりまえさ、いわなくってすむならいわないほうが利^り方^{かた}だ。」

「慶ちゃんそこへも行ったろうか？」

「行ったろうさ。——が、三浦のところへ行つて、矢つ張そういったかどうかは分らねえ。

——ことによつたらいまゝでの奴の半分だけ負けるといったかも知れねえ。」

「そうだといい、しかし。……真逆^{まさか}しかしチョコが、自分でこれ身^{しん}上^{じょう}をなげ出してかゝ

るんじゃア……？」

「あたりめえよ。チョコはたゞ儲^{たね}けたい一心よ。どさくさ紛れの火事泥を稼^{かせ}ごうつて奴よ。

——だから種^{たね}出しはちゃんと外にいる。」

「誰だ？——誰なんだ、それ？」

「承知してくれゝばといつてなか／＼いわねえ。わるく伏せている。それだけ臭いと俺はにらんでる。——新聞には関西のある若宮を最負の金持が尻押だとしてあるがどうせほんとうのこつちやアねえ。」

「誰だろう？——どこから出た手だろう？」

「俺には分つてる。」

「誰だ？ ……誰だ、おい？」

「吾妻のいのちを縮めた奴だ。」

「吾妻のいのちを？」

「この間、向島があるきながら話したことを忘れたか？」

「向島？ ——と、あゝ、公園の？」

「そうよ、樂天團の樂天坊主よ。」

「彼奴^{あいつ}、しかし？」

「地震でそのまんまになったくらみがこゝへ来てまたさえ返ったのよ。——まえのときじり／＼と遠巻にして行こうとして失敗^{しくじ}ったから……それにはそのときとは時勢も違つて来ているから、今度は一おもいに強引にひねろうとしているんだ。——汐^{しお}さきをみてななてことでなしにズバリとそうあたまから若宮一座というものを押し立てゝしまおうとかゝっているんだ。——そうしてそれがポンと一つ図にあたつたら、それをふみ台に、一気に今度は東京の興行界へ乗出そうという肚にたくみのこんたんなんだ。」

「どうして分る？」

「お前のようなふところ育ちじゃアねえ。」

「そんな、また……」

四

……そのあと、小倉は、その楽天坊主というものゝそもゝ田舎廻りの旧役者だったこと、だが機をみるに敏なかれは「書生芝居」が流行るとみると書生役者、「活動写真」が流行るとみると弁士、「喜劇」が流行り出すとみると喜劇役者、転々としてつねにその所在を変えて来ていること、体は小さいが望みは大きく、一生旅廻りで朽ちる料簡のなかったことは早くから浅草という土地に目をつけ、そこがまだ「奥山」だの「六区」だのと安く扱われ、玉乗だの、娘手踊だの、改良剣舞だの、かっぱれだのゝ見世物の軒を並べていた時代、勇敢にかれはその渦中に飛込んで、「楽天団」という看板を上げたこと。――はじめはだれからも相手にされず、幾度そこにいたゝまれない羽目になったか知れなかったものゝ、強情にもちこたえ、だんゝ客を呼ぶようになり、十年後には「浅草」での押しもおされもしない人気ものになり了せたこと。――主としてしかもその成功がかれの興行

師的の手腕（それは嘗て倭のもつていたような）によつてゝあつたこと。……そうしたことを事細かに話して聞かせた。——田代は黙つてそれを聞いていた。

が、田代は、その話のあいだにこと／＼くしおれ返つてしまった。「うたむら」の主人を相手に饒舌しやべつていたはじめの元氣は跡方なく消え去つてしまった。——ということは、一くぎりの話のついたとき、ちようどになつた銚子の代りをいいつけるせいもなく、飲みあましの冷え切つた猪口ちよくをながめたまゝ、ぼんやり腕を組んでしまった。——勿論酔いは疾とうのむかしさめていた。

で、勘定をして「菊の家」を出ると、無理に小倉を、わずかな間にもつた雪の中を松葉町の三浦のうちへつれて行つた。が、三浦はいなかった。先刻さつき一度かえつて来たがすぐまた出かけたということだった。どこへ行つた、どっちのほうへ行つた、何とかいつて行かなかつたかと、しつこく田代は、むかし千住こつで何年とかお職を張り通したという耳の遠い留守居のばアさんをつかまえて（というのは三浦は独身ひとりものだった）根ほり葉ほり訊いたが分らなかつた。——結句要領をえずに、田代は、ぼんやりまた外へ出た。

「帰けえるよ、俺は……」

合羽橋かつぱしまで来ると小倉はじゃけんに……すくなくも田代にはそう感じられた……いつ

た。

「帰る？」

「帰れよ、お前も、いゝ加減に。——いつまでそんなほつつきあるいていてもねえじやアねえか。」

「けど……」

「すこしは内儀かみさんの身にもなつてみるよ。」

そういわれると一溜りもなかった。でなくとも、先刻から、酔いのさめるのと一しよにいゝ加減さといゝろがついて来ている。——いまゝでゞも、それは、二晩や三晩はさらにあけているから……そうして、また、それを役者の附会、芸人としたらその位なことはいりまえて、売れゝば売れるほどよいうちを外にする。……清元の師匠のむすめといつても、そこは堅気だけに、あくまでそう正直におもいこんでいる相手だから、五日あけようと十日あけようとそんなことは何でもなし。——が、それだけに、そう音無しいだけに、いざとなると一入ひとしお不憫が加わる。——それには、そうする外はなかつて驅落をした十年まえも、ねがいがついて一しよになり、それまで二人の間に立つて事毎に邪魔をした……無理な、意地のわるいことばかりしつゝけた養母（いえば、かれの、震災の前後一年ほど、

由良の許しをえて大阪へ行っていたのも、つまりはその人を満足させるだけのものを稼いだすためだった（を^{おとし}一昨年の春み送った十年あとのいまでもかれのかの女をおもううえについてはいさゝかのそこに晴れくもりもない……）

「じゃア、また……」

ふんぎりをつけて田代はいった。

「明日でもまたやって来ねえ。」

小倉はしずかに眼鏡を光らした。

「どこへ？」

「俺のそこへよ。」

「うん。」

「きつと、留守に、菱川から何とかいつて来ているに違え^{ちげ}ねえ。」

「あたしア嫌だ。——いやなこつた。——何といつて来たつてあたしア断る。」

「断るにしても、しかし、下手なことをすると後腐れが面倒だ。——相手が相手だ。」

「けど、それは……」

「いゝえ、菱川ならかまわねえ。——が、もし、お前のうけとつたその金が楽天坊主から

出てゝもいると、どうまた車を横に押して来ねえとも限らねえ。——それア、あの坊主、あんな太ッ腹のようにみせて、いざとなると執念深い、まむしのような奴だから……」

「……………」

「用心にしくはねえ。——用心しといて間違いはねえ。——だから……」

「……………」

「三浦もきツと来るだろう。——俺たちがいま二人侍で行つたと聞いたら……」

すぐに電車は来た。小倉はそれに乗つた。——灯ともしごろのふりしきる雪の中にたちまちその電車のかげはみえなくなつた……

五

そのあと、田代は、借りて来た「菊の家」の番傘をさして、一人とぼく公園のなかへまた入つて行つた。——代地の明治病院のそばまで帰るんだから、ほんとうなら一しよに小倉と、蔵前ゆきのその電車に乗るのがあたりまえだった。が、そうしなかつたのは、四日ぶりで逢うかの女のために、かの女の好きな名所焼のみやげを仲見世で買う必要があつ

たからだつた。——で、公園へ入ると、かれは池のふちを真つ直に仁王門のほうへあるいた。——とツぷりもう暮れ切つたなかに、ふみしだかれた雪みちの、一すじほそ／＼とつゞいているのと、両側の木立の、暗い梢をしずれて落ちる雪の音とがむやみにかれを寂しくさせた。

で、名所焼を買うと、今度はかれは一刻も早くうちへ帰りつきたくなつた。雷門を出るとすぐ茅町までかれは円タクに乗つた。

が、そうはいつても、やがてわが家のまえに立つたとき、今更のようにかれは闕しきいの高いのを感じた。なぜなら降るからそうしたに違いない片戸ざし。……格子に半分雨戸を入れた門口のさまが、そう思つてみるせいか、主人のいないうちの寂しさをはつきりかれに感じさせた。——長い旅からでも帰つて来たときのような心弱さが急にかれの胸もとにこみ上げた。

「おい……」

ことさらかれは勢いよく、しまりをしたその格子に手をかけた。

「はい。」

ものゝ響きに応ずるように返事が聞えた。——すぐに上り端と茶の間との間の唐紙があ

いてあかりのいろが暗い中に流れた。かの女は土間に下りてかきがねをはずした。

「お帰んなさいまし。」

そういうかの女の片頬に江戸ざくらのみじめに貼つてあるのをかれはみ逃さなかった。

「どうかしたのか？」

「えゝ？」

「いゝえ、頬ツペたよ。」

「えゝ、齒が……」

「痛いのか？」

「えゝ。」

「よッぽどか？」

「いゝえ、すこしなんです。——直つたんです、もう……」

が、そうはいつでも、昨日きのうあたり結び日だったのを無理にもたせた銀杏返しのほつれが鬱陶しくそのうえに下つていた。

「あゝ冷めたい……」

そのまゝかれは、問わず語りにそういうと、傘と名所焼のつゝみをかの女にわたし、手

袋を脱^とつて濡れた靴の紐を解いた。

「誰か来なかったか、留守に？」

座敷へ上るなりかれはいつた。

「えゝ、もう少し先刻^{さつき}、三浦さんがみえました。」

「三浦が？」

「えゝ、二時間ばかりまえ。——どこへ行つたろう、疾うに帰つてなければならぬんだが？——しきりにそういつてゐた。」

「で、何とかいつて行つたか？」

「いゝえ、じゃアまた来る、そういつてすぐお帰りになりました。」

「何にも外にいわなかったか？」

「いゝえ、何にも。——いつもと違ってなんだかむずかしい顔をしておいでゐたわ。」

「ごたくが出来たんだ、ごたくが。——それでみんなほう／＼駆けずりまわっているんだ。」

「……………」

「昨夜^{ゆうべ}だって、一昨日^{おととい}の晩だって、ろくにこつちは寝てやアしない。」

「……………」

「外には誰も来なかったか？」

「いゝえ、誰も。」

「昨日ぐらい菱川のところから誰か来やアしなかったか？」

「いゝえ。」

「来なかったか？」

「えゝ。」

「可笑しいな。」

「来るわけになつてゐるんですか？」

「なつてゐるんだ。」

「そういうながら、かれは、上着の內衣兜うちがくしから袱紗ふくさにくるんだ紙入を出して筆筒のうゑに置いた。

「そのなかの五十円……」

「何にも知らないかの女は炬燵のほうからかれの平生着ふだんぎをもつて来た。——そのかの女の肩をいきなりかれは引きよせた。

「寂しかったろう、おい……？」

犇^{ひし}とばかりかれはかの女を抱きしめた。

六

あくる朝、起きぬけに……といつてももうそのときは十時をすでに過ぎていたが、いそいで田代は三筋町の小倉のところへと家を出た。――雪は止んだが、空はまだ暗く陰気に、未練たらしく灰いろに曇っていた。――時間のわりにつもりよりの早かった……ということは、それだけよけいに降り、それだけよけいにつもった昨夜^{ゆうべ}の美しい銀世界のさまはすでになく、どこをみても沼のようなぬかるみの、しかも無慚に蹴返されふみかえされた泥の中を、若い役者らしい見得もかざりもなく、不恰好なゴムの長靴で勇敢にかれはあるいて行つた。

途中、かれは、公衆電話で「矢の倉」の師匠のところへ電話をかけた。女中が出て来て「先生は御旅行中でございます。」といった。ではお嬢さんかというと「お嬢さんも御一緒でございます。」と木で鼻をくくるすげないあいさつだった。かれは寂しい気がした。

……と同時に、まアよかった。——なぜかそういうほッとした気がした。

小倉の顔を見るとすぐかれはそれをいった。

「旅行中だ？」小倉は眉を顰^{しか}めるようにした。「で、どこへ行ったといった？」

「それは聞かなかったが、お嬢さんと一しよというんだから、いつものまた修善寺へでも行っただろう。」

「何日行ったといった？」

「それも聞かなかった。」

「何にもならないじゃアねえか、それじゃア。」

「だってあのこのごろ来た女中。——まるツきし分らないんだ、話が。——よッぽど慈姑^{くわい}のきんとんに出来上っているんだ。」

「この間お前の行ったときにはそんな話はなかったのか？」

「何の話もなかった。——だから急にでも行っただんじやアないかと思う。」

「うむ、そうかも知れない。」

「矢ッ張、今度の話なんぞいろ／＼耳に入るんで。——こっちにいちやア、矢ッ張、何かと面倒臭いんで……」

「そうだろう、おそらく。——が、そういえば、若宮もいま東京にいないんだ。」

「どうして？——可笑いじゃアないか、それは？——誰に聞いたんだ、そんなこと？」

「昨夜三浦が行って聞いて来たんだ。」

「三浦が？」

「昨日、三浦、西巻とお前にわかれて家へ帰ると菱川から手紙が来ている。二三度足を運んだがいつもいないからというんで寄越した手紙だ。——すぐ来いとしてあつたから行つてみると実はこれく……みんなもう承知しているこつたから否やはあるまいがという高飛車な掛合だ。——万一、もし、不承知のようならいまで貸した金を残らずくで綺麗にしてもらいたいといったそうだ。——が、あの男のこつた、逆にさきをくづつて、いまでの奴を負けろとはいわない、それはそれとして、べつにくで改めて五百と六百とまとまったものを都合してくれるなら身売をしてもいい。——その代り身上しんしょうの贅沢はいわない、どのみち何とか色は附けてくれるんだろうから。——さきの出ようが出ようだから。こつちも構わねえ、高飛車に出てやつたとそういつていた。」

「酷い奴だ。——だが、それじゃア君んとこへ来た話とは違うじゃアないか？」

「人を見て矢つ張法を説くのよ。——で、三浦、いずれもう一度あうことにしてそこを出ると、すぐその足でお前のところへ行つた。——と、まだ帰っていいえ。——それならとことのついでに浜町まで伸して若宮のところへ行つた。……というのが菱川の話しじゃアもう一つ腑に落ちないものがある。一度これはじかに当人にぶつかることだ。——そう思つたのは矢つ張あの男だ。——さすがにすかさねえ。」

「で、行くと？」

「書生が一人留守居をしていて、先生は東京にいらつしやいません。」

七

田代にはしかし信じられなかった。留守をつかうんだ、それは。……そうとしか思えなかった。——が、そうはいつても、また、相手が相手である。やみく／＼そう留守をつかわれて、左様ですかとそのまま音無しく引下る三浦ではない。ことによると、これは、手筈のすべてと／＼のうまで、わざとどこかに身をかくしているのかも知れない。——そうすれば不思議はない……

「が、それは。」小倉はうなずかなかつた。「世間にまだこのことのぱツとしないうちなら、それは若宮のような神経の強い男のこつた、そうする必要もあつたらう。が、新聞にまであゝ麗々と出てしまつたいまとなつちやア、何もそんな卑怯に逃げかくれるこたアねえ。そんなことをしていたら一座の規模が立たねえ。」

「それは、しかし、チョコと楽天坊主とですつかり取仕切つていれば……」

「それじゃア、いまゝでの、こつちの芝居とおんなしじゃアねえか。——何でもかんでも会社まかせの御無理御尤もにしたいいまゝでの由良一座とちツとも変らねえじゃアねえか。——そんなことなら、若宮。……そんな、いゝえ、ちよろツかなことだったら、あの男、どうしてはじめツからそんな話に乗るものか。——あゝみえて、あの男、いざとなつたらテコでもうごくんじやアねえ。」

「とは思ふけど……」

「さきへ行つてはどうでも、はじめの一月二月は諸事若宮のいうなりにするに違いない。——すくなくもそういう約束になつてゐるには違いない。」

「と、いよく立役たちやくで売るつもりかしら、若宮君？」

「そうだろう、大方。——女優を使うということが一つのまたうりものになっているんだ

から。」

「だが、そんなことをいつて、若宮君の相手の出来るような女優がどこにいるんだ？」

「どこにだっている。『楽天団』の中にだけだつて十人や二十人はいる。」

「あんな——あんなもの……」

「と思うのはお前のような奴ばかりだ。世間じゃアそうは思わねえ。——よくしたものだ。」

「だつて、君……」

「とにかく『矢の倉』の一座にいた分には嫌でもいつまで女形でいなくっちゃアならない。いくらそれじゃア当人が伸^のそうと思つたつて伸せない。今度の独立の動機というものもいえばそこにある。——實際あゝいう好い役者を、いくら自分の仕立てたものだからといつていつまで『矢の倉』が手許に引きつけて置くつてことはない。——菱川でも俺のところへ来ちゃア仔細らしくしきりにそういつたもんだ。」

「いえ、それは。——それはその通りだ。——あたしア、若宮君のような、あゝいう人こそ天才というんだらうと思つている。——だからあたしア同情する。——だから、自分から、たとえあの人『矢の倉』の手を離れたからつて義理を知らないとも恩を知らないと

も決してあたしア思わない。」

「そんならことのついでに行つてやつたらいゝじゃアねえか。」

「いやだ、それア嫌だ。」

「どうして？」

「そもくのイキが気に入らない。人をペテンにかけるといふ、そんな。——第一チョコなんぞの中へ入つてゐるのが間違つてゐる。あんな奴の出て来るつて法はない。——何が分るんだ、あんな奴に？」

「そんなことをいつたつて仕方がねえ。」

「いゝえ、これがもし、若宮君直接^{じか}の話で、『矢の倉』のまえにもちやんと持出せる話なら喜んであたしア加勢する。——一年でも二年でもちやんと暇をもらつて助け^すに行く……」

「そんなこと思うか、お前でも？」

「あたしだって若いんだ、何かしたいよ。」

「『矢の倉』と心中するのは嫌か？」

「ほんとういえば嫌だ。——いまのようなあんな、引つ込思案の、大事ばかりとつてゐる、料簡のぐずぐずな『矢の倉』と心中するのは嫌だ。」

「以前はあゝじやアなかったんだが。」

「だから——だからいうんだ、あたしア。——芸だつて、演^やる脚^{ほん}本だつて、むかしアだれより新しいといわれた人なんだ。」

「お前なんぞまでしかしそういうたア……」小倉はそれにはこたえず慥然としていった。
「いよく由良一座もどうかしなくつちやアいけねえときが来た。」

八

……で、小倉も、三浦も、田代も、もう一度菱川から何とかいつて来たところでおたがいの態度をはつきりさせよう、そういう合せてわざと音無しく待つことにした。——が、二日たつても三日たつても、何とも菱川からいつて来なかった。——何の音沙汰もなかった……

「どうしたんだろう？——どうしたつていうんだろう？」

いっそしびれをきらしたかたちに、田代は、おちつかない紛れ、その日も小倉のところを訪ねた。と、かれよりもさきに三浦が来ていた。三人、その日もまた一しよになった。

「はじめの話じゃア、明日にも顔よせをして、すぐにも稽古にかゝる。——だからすぐ返事をしろ。——大した勢いだつたが……」

小倉はわらつた。

「俺にも狂言まで決つてゐるようなことをいつてた。」三浦もその尾について「何をいやアがらと思つたら案の条だ。」

「案の条つて何がさ？」田代はいつた。

「そうじゃアねえか。嵩^{かさ}にかゝつてそんな、ぐずぐず立派そうなことはほざいたつて、さアとなりやア矢つ張恰好がつかねえ。——今日は、お前、二十三日だよ。」

「そうさ。」

「春^{そうそう}勿々あけるつて芝居をそんなことでどうするんだ。——第一、小屋からしてまだはツきりしていねえんじやアねえか。」

「どこだろう、しかし、某大劇場つていうのは？」

「そんなこと真^まにうける奴があるものか、大きな小屋は、春は、どこだつてもうみんな決つてゐるんじやアねえか。」

「矢つ張、じゃア、浅草かしら？」

「そうよ、浅草出演よ。——このごろのセリフの大衆的って奴よ。」三浦は冷かに「あんな、人を喰った、ふぎけた、小癩に障る言草はねえ。」

「何が？」

「いゝえ、大衆的って奴よ。——何でもお値段が安くって、手ツとり早く、ごくそくさいでさえあればいゝしろものよ。」

「けど、それよか、あきらめたんじやアないだろうか？」田代は話の^{より}縋をもどした。

「何を？」

「いゝえ、あたしたちを。——引つ張ろうとはしたもののゝそこに何かの工合でも出来て、急に止しにしたんじやアないだろうか？」

「そうならしめたもんだ。——逆に因縁をつけてとツちめてやる。」

「どうして？」

「はじめに、勝手に、ことわりなしに名前をつかやアがったんだ。——そつちは景氣になつてよかつたろうがこつちはそのためどんなに迷惑したか知れねえ。——そのしらは、どうつけてくれるとそういつてよ。」

「君たちはそれでよくつてもあたしアそうは行かない。」

「どうして？」

「そうなれば、あたしア、借りたものを返さなくっちゃアならない。」

「何だ、そんなことを怖がつているのか？」

「怖がつちやアいないさ。怖がつちやアいないが、そうしなかつたら、チヨコのこつたもの、どんなまた阿漕あこぎなことをいつて来るか知れない。」

「いつて来たつていゝじやアねえか。——打捨うちちやつとけ、そんなこと……」

「君じやアないよ、そうは行かないよ。」

「感心だ。——わけえものはそれでなくちやアいけねえ。」

「おだてなくたつていゝ。」

「おだてやアしねえ。——が、それほど覚悟をきめているなら……というよりは、それほど気前がいゝならどうせ手のついた金だ。まだ残つてるだろう、すこしは。——どこかへ連れて行きねえ、二人を。——『菊の家』でいゝから連れて行きねえ。——なア小倉……？」

「いゝだろう、それも。」ともに小倉もいった。

「戯じよ、戯談じようだんだろう。」

田代はいそいでふところを押えた。……というのは、めずらしくその日、荒い縞の、いかにも女形らしいお召の着附に、意気な、幅のやゝ狭い紺こんけんじょう献上の帯をかれはしめていた……

「往生際のわるい。——骨は拾つてやるよ、二人が。」そういつて、すぐ、有無なく三浦は立ち上った。「さア、おい、早いところ出かけよう。」

……ちようど、それは、冬至の日の、時間にして西巻が湯に行く途中、鰻屋の出前持と機嫌よく立話をしていたと同じころだった。——刻限はよし、天気はよし、どのみち三人あつまればそのまんま恰好をつけずにわかるわけがない。……田代にしても、そこはしまりのない東京育ちの、あらかじめそんなことになるだろうとは思っていたのである。——三浦のいう通りどうせ手のついた金だ、足りないものだ、いざとなればまたどうにかなるだろう。——かれはくゝるつもりもなく多寡をくゝった……

「わるい友だちはもつもんじゃない。」

わざと、ふしよう不承、田代もそういいつゝ立上った。——と、そのとき、急におもての格子があいた。

「御免……」

九

……聞覚えのある声である。——おもわず田代は二人の顔をみた。

「どなた？」

小倉の代りに三浦が突ツ慥食にそれにこたえた。

「へえ、わたくしで。——吉沢で……」

「吉沢？」

……といえば「矢の倉」の男衆。おとしゆ——中洲時分から附いている由良のところの男衆である。

「何だ、君。——誰かと思つた。」

障子をあけて拍子拔のしたように田代はいつた。

「へえ。——実は、いま、お宅へ上りましたので……」

相手はあいそよく中腰をかが屈めた。

「うちへ？」

「へえ。」

「何か、用……?」

「へえ、その。——一寸その『矢の倉』までお越しをねがいたいんですが。」

「帰って来たのかい、先生？」

「へえ。」

「何日？」

「今日こんにちその急に。」

「急に？」

「へえ。」

「どうして? ——それより、しかし、どこへ行つてたんだい、先生？」

「へえ、修善寺へ。」

「だろうと思つたんだ。——きつとそうだろうと思つたんだ。——けど、何だつてそんな。」

「何だつてそう急に……?」

「いゝえ、それが。——よく分りませんのですが、しかし。——何かしかしそのことでみなさんにおいでを願うような……」

「と、あたしだけじゃアないのかい？」

「へえ、小倉先生にも。……三浦先生のところへもこれからうかぐうんでございます。」

「いるぜ、君、三浦君も。——矢つ張こゝにいるぜ、君。」

「あ、さよでございますか？——それは大へん……」

「おい、慶ちゃん……」田代はうしろを向いて三浦を呼んだ。

間もなく、吉沢は、もう一けんこれから頭取のうちへ行くといつていそがしく帰って行った。——そのまゝ座敷へ返った三浦と田代は、小倉と三人、急に引緊った感じの顔をたがいに見合せた。

「何だろう？」

とりあえず田代はいった。

「そんなこつたろうと思つたよ。」三浦はおもむろに頤あごを撫で、「いかに何でもあんまり音無しすぎと思つたよ。」

「何が？」

「いゝえ、大將がよ。」

「知らなかったんじやアないだろうか？——急にそれが分つたんで、驚いてすぐ……？」

「そんな馬鹿な奴があるものか。」

「とは思うけど……」

「そんなことなら、しかし、頭取が来なくつちやアならない。」小倉はしずかに口を開いて「それを吉沢がつかいに来たのはこれは……キツとこれはそうじやアなく外のことだ。」

「そうかしら？」

「とにかく、しかし、すぐ来いっていうんだから行かなくつちやアなるまい。——出かけようじやアないか。」

「何だかしかし気味がわりいなア。」

「なぜ？」

「なぜってさ。」

「何をいやがる、『菊の家』を助かりやアがったくせに……」

そういつてすぐまた三浦は立上った。

……行つてみて驚いた。——明るい燈火あかりの輝きのなかに、由良と、筑紫と、汐見と、じつとそれ／＼、眼をふせ、眉を曇らせていた。

だまつて由良は一通の手紙を三人のまえに出した。——三人はおず／＼それをあけてみた。——信州のある片田舎から由良にあてゝよこした若宮柳絮の書置だった。

……一時間あと、小倉と田代は、汐見と一しよに若宮のその自殺した場所へいそぐため上野から汽車に乗った。——三浦は、あとから来た頭取の岩永と二人で、一座の重立ったものゝところへそのことを触れてあるいた。

夕焼雲

一

……空くうに、夢のように一月はすぎた。——ということは若宮のこの後始末のうちにあ

わたゞしくその年は暮れて行つた。（葬式は、書置に、出来るならそうした儀礼がましい供養がましいことは一切やらないでくれという意味のことのかた／＼書かれてあつたのによつて、由良は、ほんの内輪の、かたちばかりの告別式を自分の手で執とりおこな行つた。――勿論、それについては、何としても相手の、若い、美しい、売れるさかりの華奢はでをきわめた人氣ものだけに……それには、そうした、あたりまえでない、世間の眼をみはらせた最後だけに、同情だの憐憫だのおせっかいだの、交つたいろ／＼の非難や不服をいうものもあつたが、頑として由良は、つねのその「矢の倉」のさまに似ず、決してそれに耳を藉かさなかつた。そうして、強情に、あくまでそのかれの言分を通した。――一つには、それは、汐見と小倉と田代の三人が引取りに行つて来た亡骸なきがら。……骨にしてさびしく抱えてもどつたそれを、自分の手に押えて、いくらしても由良は若宮の親たちへわたさなかつた。……それも、矢つ張、書置をたてに、何としてもその親たちからの要求がえんを肯じなかつた。）――で、そのあと春になると、小倉も、三浦も、田代も、従来の由良一座の奥役の手でそれ／＼稼げる口を……といつても三人一しよではなく、わかれ／＼のお預けながら、でも、そのために、どうにかまア正月を遊ばなくつてすむしがくが与えられた。――勿論、それには、由良のなみ／＼でない心づくしをはつきりその背後にみてとることが出来た。

——いうまでもなく「若宮一座」というものは、若宮のいなくなつたとともに、影もかたちもとゞめず、うやむやに煙のように消え去つた。

一月の二十日すぎになつて、それ／＼みんな、おの／＼のその出さきから歸つて来た。小倉でも、三浦でも、田代でも、……またその外の、田代以下の四五人の人たちでも、そのまゝそこにいつこうと思えば、……そのまゝもつと働こうとさえ思えばいくらでもそこで働くことが出来たのだつたが、さすがに誰も、いざとなると、東京恋しく約束の日限^{ひぎり}だけで、いそいでみんな歸つて来た。——よしそれが以前のようなさまはなく、雨も漏れば、風もみじめにふきこむようなそんなしがない巢^{なつ}になつたといつても、かれらにとつては、永年の住み馴れた、何ものにも替難い可^{なつか}懐しい古巢^{なつか}だつた。——よし、また、どんなに旅へ出て手厚くされようと、どんなに余分なものが拵めようと、どんな大した大名題^{おおなだい}のよう^いにふるまえようと、（實際、それは、旅へ出て、そうした田舎をばかり始終あるいてゐる人たちのなかへ入れば、始終東京で、それも大きなところでばかり踊つてゐるものは、知らない間についてゐる身の箔^{はく}が自分にさえはつきり分るほどだつた。おそろしいのは育ちであり、また、修業の貴さだつた。田代のようなふところ子にしてそうだから、小倉や三浦のような、千軍万馬往來の、そういうビタのなかにも永年いたことのあるものにはな

おのことそうだった。だから、彼等にとつて、そんなことは何のことでもなかった。――
――偏^{ひと}えに、それよりも、親身な、親切な、弟子おもしろい師匠の膝下へ一日も早く帰りたかつた。

二

で、帰るとすぐ、みんなそれ／＼帰ったことのあいさつに「矢の倉」へ顔を出した。

田代は……ほんとうなら、かれは、先方^{さき}の打日^{うちび}の都合で、もっと早くも帰れるのだったが、前以て細君のところへいつてやつて置いた日取りよりつまりはそこに二三日だけごまかしのきくものゝ出来たのをいゝことに、いえば棒さきを切り、途中で汽車を下りてまえ／＼から鼻負になつてゐる名古屋の客のところへ骨休めに寄つた。――が、結句、まアもう一日、いゝじやアないか、明日まで。……引留められるまゝ、うか／＼と、いゝ氣になつて酔ッぱらつてゐるうち三日というもの余計にととう足を出した。――で、氣がついて、狼狽^{あわ}てゝその晩汽車に乗り、あくる朝東京駅へつくといそいで家へ帰り、一月の間ほとんどそればかり着ていた洋服を脱ぐとそのまゝ湯にも入らずすぐに「矢の倉」へ飛んで行つ

た。——なぜそうしたのか、そんなにまでする必要がどこにあったのか？……かれは自分にも分らなかつた。……てれかくし、……細君に対してのてれかくし。——つまりはたゞそれだけだつた……

行くと、ちやうど、小倉と三浦とが言合せたようにさきへ来ていた。書齋の次の間に火鉢を控えて涼しい顔ですわつていた。——小倉も、三浦も、ともにその前の日ぐらい帰つて来たのらしかつた。

「いまお前のうわさをしていたところだ。」

書齋の大きな机のまえから由良はいつた。「いつ帰つて来たんだ、お前は？」

「へえ、今朝……」

「今朝？」

「へえ、いえ、一寸帰りに名古屋へ寄りましたもので……」

うツかりそういつて、田代は、三浦のそばにすることにすぐ気がついた。失策しまつたと思つた。うわさをしていたという以上、相手が三浦なら、ロクなことはいわれないにきまつて
いる……

「何しに？」

「へえ、一寸……」

「飲みにか？」

「へえ、いゝえ……」

「いゝから、まア、飲め。——たんとずツこけろ。——若いうちはそのほうがいゝ。」
「……………」

おもわず田代は由良の顔をふり仰いだ。——いつにもそんなことをいったことのない人である、勝負事のつぎには酒のことをやかましくいう人である、飲むな、決して飲むな、いゝ役者になろうと思つたら決して飲むな、始終いまゝで、自分にむかつてもそうばかりしかいわなかつた人である……

「若宮が……お前の半分でも若宮が飲んだらあんなこともしなかつたろう。……もつと外に思案のしようもあつたろう。……そう思うんだ、俺は……」

すぐ、また、言葉を継いで由良はいつた。——そういつて、わざと、晴れやかに、機嫌よく由良はわらつた。

三人、そツとさびしく眼を交した。

三

「たしか、しかし……」さりげなく小倉はいった。「ちようど、今日、三十五日に……？」
「そうだ、そうなるんだ。」由良はすぐ引取って「だから、これから、墓まいりに行つてやろうと思つてゐるんだ。」

「喜んでおりましょう、しかし……」

田代はそれに調子を合せた。

「誰が？」

「いゝえ、若宮君……」

「可哀想な男よ。」由良は、それにはこたえず、半ば自分にいうようにいった。「日の経つにつれてだんく身にこたえて来る……」

「へえ。」

「どこかへ行くのか、これから？」と、急に、由良は眼を上げた。

「あたくしでございますか？」

狼狽あわてゝ田代はいった。

「いゝえ、小倉も、三浦も……？」

「べつに、いえ……」

そういつて小倉は三浦をふり返った。——来たぜ、おい。……三浦はそういった工合にそつと頤あごをしやくツてみせた。

「もし体があいているなら、どうだ、一しよに行かないか、俺と？」

「へえ、有難うございます。」田代は頭を下げた。

「有難うございますじやアない、行かないかとさそうんだ、こっちは。——よかつたら行つてやれ。」

「どうせ、いえ、行こうと思つてゐるんでございますから……」

「どうだ、そつちは？」

「いえ、わたくしども。——お供いたします、こちらも……」

小倉に代つて三浦はこたえた。

「じやアすぐ。飯をくつて出かけよう。」

由良は性急に手を叩いて女中を呼んだ。昼の仕度をいいつけると一しよに自動車の用意を命じた。——さアといえはさアが江戸っ子の悪い病である。

「墓まいりつて奴は大ぜいの方がいゝ、——一人や二人だとわるく料簡がこずんでいけねえ。」

そのあといつそまた機嫌よく由良はわらつた。

それからじき一行五人は……由良とその三人の外に吉沢が加わつた。……谷中の天王寺の五重の塔のまゝで自動車を下りた。空のあさく〜と晴れた、風のない、日のいろのおだやかに和んだ午後だつた。要木^{かなめ}だの榎木^{まさき}だのゝ低くさびしい垣つゞき。……その間の、人けのない、一すじ石のいろの白くしずんだ細道のうゑに、櫛^{しきみ}をもつたり線香を煙らしたりした弟子師匠の、五つのそのもつれて行く影がしずかに濃く落ちた。

「陽気は正直だ、——わずかなところでぐツともう春めいた。」

さきへ立つた由良のふいとそう振返つていつた。

「そうでございます。——このまゝ三七日にまいつたときにはまだ……」

それにこたえて吉沢のそういうのかぶせてまた由良はいつた。

「どこもかも凍てついていた。——いまの時間でまだ霜柱がとけなかつた。」

四

あたらしい、木の香の濃い塔婆にかこまれ、蟲負さき客さきからの心をこめた美しい……というよりは、早咲の梅だの水仙だの、いつそ寂しい、しめやかな花のかげにうもれた古い、小さな墓……それは、若宮の、ありし日のおもかけを偲ばせるには、あまりに惨めないじらしいものだった。……のまえにやがて五人は立った。——由良は、帽子と外套を吉沢にわたし、そのまえにすゝんで、しずかにしばらく額ぬかをふせた。——小倉も、三浦も、田代も、いまさらのようにあの晩のことを……書置によって、若宮の、すでにもうこの世にいないことを知ったあの晩の、ポカンとした、うつろのようになつた心もちを果敢はかなくおもい返した。——と同時に、なぜ死んだ？……むすぼれ解けないその謎が……日の経つにつれていよく濃くなつて来たそのうたがいの影がいまさらのようにまた三人の胸を掴んだ。

「お待ち遠……」

そういつて由良はそのまえをはなれた。——手近の要木垣に外套を投げかけ、そのあと代つて、小倉がすぐそのまえに立つた。

「……感心な男よ。」

半ば自分にいいながら由良は帽子だけ吉沢からうけとった。

「へえ？」田代はいった。

「いゝえよ、西巻よ。」

「……………」

「ちやんともう今日でも早く参詣に來ている。——むかしの奴ア、矢つ張律儀だ。」

田代も、三浦も、由良のその指すほうへ眼を遣った。——その梅だの水仙だの、なかにあつて、冬つばきの、哀しくもやさしい真紅のいろを綴っているのが金平さんの心いれだった……

「それにしても、これ。」すぐまた由良はいった。「いつまでこの墓の中に居候させて置くことは出来ない。——そう思つていそがしている。——だから百ヶ日までには、ほんとうの、若宮だけの奴が出来る。」

「あゝ、それは……………」

田代はそれにこたえた。

「出来たら、そこで、にぎやかに追善をしてやろうと思つている。——当人の料簡がいじらしいから、……………当人のそういうのがもツともだからいまゝでこつちも強情を張りつゞけ

た。入らざる意地を立てぬいた。——が、もういゝだろう。——百ヶ日までになればもういゝだろう。」

「へえ。」

……とはいったけれど、田代には、若宮がまたどうしてそう儀礼がましいことや供養がましいことを一切やらないでくれ……なぜわざ／＼そうしたことを書置に書いたのか？

どうしてそうしたことをやられるのが嫌なのか？——かいくれその理由が分らなかった。

——ということは、また、同時にそれを、その遺言を、そうまで師匠がどうしてそんな大切にかけるのか？ どうしてそう強情を張りつゝけたのか？ どうしてそう意地を立てぬいたのか？——もつとそれより解げせないのは汐見と小倉と自分とでもって帰った骨を何としても親たちの手にわたさない……飽くまで押えて渡さなかった。……そのいりわけがどうしても田代に分らなかつた。——げんに名古屋の客さきでも、根掘り葉掘りそれを訊かれ、返事が出来ずこと／＼くこまつたのである……

「……………」

だまって小倉は墓のまえをはなれた。——代ってまた三浦がそのまえにすゝんだ。

「しかし……俺もしかし若宮の墓の心配をしようとは思わなかつた。」

やがてまた由良は寂しくわらっていった。——どこかで落葉を焚いている煙が、浅い春を、しずかにうすくとあたりに立迷った。

五

……五重の塔の下まで五人は引つ返した。そこで、小倉、三浦、田代の三人は体よく由良とわかれた。——由良は吉沢をつれて待たせてあつた自動車に乗った。

そのまゝ、三人は、上野の方へは逆の、広い墓地のなかをなおあるきつづけた。

「いゝのかい、こんなところへ来て？」

ふいと、田代は、立留つてあたりをみ廻した。

「いゝからあるいているんだ。」

邪慳にそういつて三浦はずん／＼さきへあるいた。

「どこへ行くんだ、しかし？」

「停車場へ行くのよ。」

「どこの？」

「日暮里のよ。」

「日暮里？」

「大丈夫か、おい？」そばからしかし小倉もいった。

「だまって附いて来ねえ。——何にもいうこたアねえ。」

みるかぎり墓と塔婆の冷々とうちつゝいた細い道を右へ曲ったり左へ切れたりした。——が、やがてその墓地を抜けて、立並んだ格子づくりの小さなその家々の間に、おもいもよらない木立だの寺の門だのをみ出したりする、しずかな、しら／＼した感じの古い往来のうえに三人は出た。——そこにはまれない人通りの外に車の音さえ……それこそ自転車のベルの音さえどこにも響いていなかった。

「御機嫌だったな、しかし……」

急におもい出したように田代はいった。

「何が？」三浦はふり返った。

「いゝえよ、おやじよ。——いつにも、あたしア、このごろおやじのあんなハッキリした顔つきをみたことがない。」

「以前は始終あゝだったんだ。」

「だから、いゝえ、このごろといっているじゃアないか。——以前、始終、あんなだつたこたアあたしだつて知っている。——知ってるから、だから、あたしアそういうんだ。」

「どこへでも俺たちをつれて出る。——その料簡になればいゝんだ。——うそにもそうした気になればそれでいゝんだ。」自分にうなずくように小倉はいつた。

「何だぜ、あれ。……わかれたくなかつたんだぜ、まだ。……ことによるとどツかへもつと連れて行くつもりだつたかも知れないぜ。」

「このうえ窮命させられてたまるものか。」

はきだ
吐出すように三浦はいつた。

「可笑しいよ、實際可笑しいよ。」田代は急にわらつて「おやじの前へ出ると、慶ちゃんでも不思議に手も足もなくなつてしまふから可笑しいよ。」

「ふざけちゃアいけねえ。」

「そうじゃアないか、ほんとじゃアないか。——まるで猫みたいに音無しくなつてしまふじゃアないか？」

「何かいえばうるせえからよ。」

「そんな、また……」

「この二三年、どこへ行くにも必ず一人だった。」小倉は話をあとへもどして「よしそこに、眼のまえに誰がいたって、決して一しよに來いといわなくなった。——どうしてそうこずんでしまったか？——あんなにぎやか好きの人がどうしてそうしゅんでしまったか？——気にしていたんだ、俺は……」

「そうなってからだ、しよつちゆう額に八の字をよせるようになったのは。」三浦は言った。「不思議に、今日は、はじめツからその八の字が出ていなかった。」

「いゝからまア、飲め、たんとずツこけろ、若いうちはそのほうがいゝ。……驚いたよ、あたしア。——何年にも、あたしア、あんなさばけたことをおやじにいわれたこたアない。」

「うん、あれは俺も一寸^{ちよいと}おどろいた。——何をいい出すかと思った。」

「が、そのあとがいけねえ。——お前の半分でも若宮が飲んだらあんなこともしなかったろう、もつと外に思案のしようもあつたろう。——あいつは一寸痛かった。」

わらつて小倉はいった。

六

「けど。」田代はそれを遮るように「知ってるんだろうか、おやじは? —— 分ってるんだろうか、おやじには?」

「何が?」

すぐ、また、三浦はいった。

「若宮君の死んだわけがさ。—— どうして若宮君の死んだかゞさ。」

「嫌になったからよ。—— 生きてるのがいやになったからよ。」

「そんなことア分ってる。—— 生きてるのがいやになったから死ぬ、だれだってそんなことア分ってる。—— こつちのいうのはその、なぜ、じゃア、いやになった? なぜそう生きてるのがいやになった? …… それをいうんだ、あたしア。」

「みねえのか、お前、新聞を?」

「みているさ、毎朝。—— それも君のように、いち／＼大屋んとこへ頭を下げて借りに行くんじゃない、ちゃんと自前で、うちへ毎日来るのをちゃんとみているんだ。」

「うるせえな、大きいお世話だ。—— どっちだって読む味にかわりはねえ。」

「幾らかわりはないツたつて……」

「そんなことよりみていたら分りそうなもんじゃアねえか? —— あんなにいろ／＼……七十五日まだ経たねえんだから無理もねえが、いまだに好きなことをいろ／＼書いているじゃアねえか?」

「というのは?」

「おもう女に捨てられたからだとか、借金で首が廻らなくなったからだとか、師匠にそむいて旗挙しようとしたのがうまく行かなかったからだとか。……一番可哀そうなのは気がへんになったからだ、でなくつても前々から工合が可笑しかった、だから用心して転地させた。——と、附いて行つた女房の眼をぬすんで、予て用意のピストルを出して……」

「君は。——君は、慶ちゃん……」いそいで田代はいつた。「ほんとにするのか、そんなことを? ——ほんと々思うのか、君は? ——でたらめな、そんな、いゝ加減な、根も葉もない……」

「……ことゝは思わねえ。」三浦はずけりといった。「何をいつてやアがるとは思つたけれど、でもない、また、大きにそうかも知れねえ。ことによつたら、此奴……」

「そんなことをいつて、君……」いそいでまた田代は遮つた。「じゃア、君は。……いゝえ、どこにそんな若宮君のおもう女がいた? どこに、そんな、若宮君に首のまわらない

ほどの借金があつた？——『若宮一座』の話だつて、いまになつてみりやア、チヨコと樂天坊主とが勝手にそうしくんだ仕事で、ほんとうに若宮君に、そんな氣があつたかどうかそれさえ分らなくなつて来ているんじゃないか。——氣がへんになつたといえ一番それが手ツとり早いもんだから……都合もそのほうがいゝもんだから、平生若宮君をよく思わない奴なぞみんなそう決めていやアがる。——けど、氣のへんになつたものにあの書置が書けるか、君？——あんなちゃんとした覺悟をきめたものが書けるか、君？——それより可笑しいのはピストルだ。——前々から少しでもそんなけぶりのあつたものにどうしてそんなあぶなツかしいものをだれが持たせる？——もっとそれより滑稽なのは附いて行つたという細君だ。——一体、君、若宮君に細君があつたかい？——細君みたやうな人でもあつたかい？——あたしア知らないよ、若宮君にそんなものゝあつたという話だつてあたしア知らないよ。——あたしの知つてゐる若宮君は一人ものだった。——勿論、信州へだつて一人でいつたんだ。——死ぬまで、だから、若宮君は一人ものだったんだ。」「じゃアどう思うんだ？——どう思うんだ、お前は？」
いっそ冷かに三浦はいつた。

「分らないんだ。——分らないんだ、あたしには。——だから訊くんだ。」

じれツたそうに田代はいった。

七

「ざまアみる。」わざとそう憎^{にくてい}体^{たい}にいったあとで三浦はいった。「おせえてやろうか？」

「何をいやアがる。」田代は中^{ちゅう}ツ腹^{ばら}で「小倉君、分^わつてるか、君には？」

「知^しつてるんだ、三浦は。——俺もこの男に聞いたんだ。」小倉は三浦のほうを向いて

「外のものじゃアない、話してやれよ、おい。」

「知^しつてるだろう、お前、若宮^{わきみや}とこの家の中を？」

それにはこたえずケロリとしたさまに三浦はいった。

「若宮君のとこの？」

「どんなさまだかつてことをよ。——若宮のおやじやおふくろつてものがどんなしだいだかつてことをよ。」

「それは知っている。——お父^{ちち}つあんて人もおつ母^{はは}さんて人も、如才^{じさい}のない、愛想^{あいしやう}のいゝ人^{ひと}たちだ。——だから家^{いへ}ん中は始終^{しじう}にぎやかだ。」

「そんなことをいつてるからものゝ間違いが出来るんだ。」

「どうして？　——若宮君は、あの通りの、世間でも評判の親おもしろいの人なんじゃアないか？　——そうされゝば、人情で、誰だつてそうするのが当りまえかも知れないけど、そういうつても、だから、お父つあんやおつ母さんのほうでも若宮君を大切にした。——若宮君のことつていうと二人とも夢中だった。——それは、まア、麒麟児といわれた子役のむかしから手塩にかけて、あれだけの立派な役者にしたことを思えば、したほうにしたつてされたほうにしたつてうれしいわけだ。……お互の間のまるく行かないつてはずはないじやアないか。」

「まるく行つてゐるものが、じゃア、何だつてあとでべつになつたんだ。」

「べつに？」

「あとで、若宮、おやじやおふくろとわかれて別に一人で家をもつたじゃアねえか。」

「もつたさ。——もつたけど、それは……」

「じゃア、もう一つ、それほど大切におもつてゐるせがれに何だつていつまで女房をもたせなかつたんだ？」

「それは若宮君が——若宮君が自分の好きで……」

「お前は、じゃア、ずっとまえにいたあの芳町のおそのつていう芸妓のことを知らねえのか？」

「知つてるとも、よく知つてる……」

「あの女がどんなに若宮に惚れ、若宮がまたどんなにあの女に惚れていたかそれじゃア知つてるだろう、お前だつて？」

「だつてしかしあの女は。——あの女は若宮君を捨て、大阪の……」

「じゃアねえんだ、無理から生木を裂いたんだ。……おやじとおふくろとで無理から二人をわかれさしたんだ。」

「ど、どうして？」

「勘平さんじゃアねえが、三十になるやならずの若い身そらの役者……というよりは芸人が女房をもっちゃア折角の人氣に障るからよ。」

「そ、そんな……」

「分らねえことはねえといったところではまさら間に合わねえ。——そもくの大根から間違つて来ているんだ。——若宮のおやじやおふくろのあゝ若宮を大切にしたのはつまりは猿廻しが猿を大切に……手めえたちの稼業道具を大切にすると一つだったん

だ。」

「しかし……」

「しかしもへちまもねえ、あいつらは若宮の、ほんとうのおやじでもおふくろでもねえんだ。——若宮のほんとうの親たちは外にあるんだ。——若宮は藁の上から親知らずにもらわれて来た奴なんだ。」

「つまり十一月の芝居のあの芸妓よ。」ふいとそのとき小倉は口を出した。「お前がしきりに感心していたあの、悪い親^{おやきょうだい}同胞をもったゝめに苦労するあの若い芸妓の役よ。——若宮は、つまり、舞台であれ、自分の芝居をみせていたんだ。」

「……………」

「あの芸妓はしまいに気が違った。——が、若宮は、気の弱い、あゝいうやさしい男だけに、気の違わねえさき手めえで死んだんだ。」

「……………」

「今度の『若宮一座』の話だつて若宮は知らねえことだったんだ。——おやじやおふくろの勝手にさりやくしたことなんだ。——チヨコと楽天坊主にのせられて好きな熱をふいてまわったゞけのものなんだ。」

八

……トタン塀のなかに立並んだ古い大きな桜の木でその枝々は往来のうえまで拡っている。——みるとそれは小学校だった。——その塀の外れに、三四けん、荒物屋だの煙草屋だの、小さな店のつゞいたあと、三人の行くてに、石の大きな鳥居が一ぱい日を浴びてしずかに立っていた。

「おや？」急に三浦は立留った。「此奴こいつアいけねえ。」

「何だ？」

ともに小倉も立留った。

「こゝはもう諏訪神社だ。」

「そうよ。」

「こんなところへ来ちゃア。——日暮里の停車場はずつとあとだ、この……」

「いやだぜ、おい。——だから、あたしの……」

田代のそういいかけるのを三浦はかぶせて、

「ぐずぐずいうこたアねえ。——日暮里を来すぎたら、こゝまで来たんだ、もう一呼吸^{ひいき}伸して田端へ出りやアいゝ。」

「田端？」

「驚くこたアねえ、こゝを抜けて崖ツぶちへ出りやア一足だ。」

日を浴びた鳥居も、また、玉垣も、枯々とした木々の、入交った枝の影をさびしくその膚^はにうつし出していた。——斜^{はす}に白くつめたくのびた石だゝみのうえをそのまゝ広い境内へ入ると、櫻だの、銀杏だの、枯れた梢のたか／＼と空にそゝる間でみたらしの手拭がそよりも動かず、神樂堂もむなしく戸を下ろしていれば、見晴しの、むかしながらの崖のうえに並んだ茶店もたゞその心細い骸^{むくろ}をさらしているばかりだった。——前後左右すべてヒツソリと、三人の外にはどこにもそこに人のかげがなかった。

「むかし、俺たちの、始終こゝへ小遣いをかせぎに来たことをお前なんぞ知らねえだろう？」

そういいながら三浦はあたりをみ廻した。

「知るもんか、そんなこと。」

「活動をうつしに来たんだ、活動を。——『金色夜叉』でも『ほとゝぎす』でも、その時

分には、みんなこゝで……こゝだの、花見寺だの道灌山だのでみんなうつしたもんだ。」

「外にはどんな連中？」

「どんな連中もこんな連中もねえ、その時分の大部屋のものは内密ないしよでみんな稼いだんだ。

——そのまた中間なかへ入ってサヤをとる奴なんぞいたんだ。」

「誰だ、それは？」

「チョコなんぞその先立だったのよ。」そういつて小倉のほうをかえりみた。「チョコ、

彼奴あいつ、あの時分でいゝ加減こしらえたと思うがどうだ？ ——あれからだもの、彼奴のち

いゝし出したのは……」

「そうかも知れねえ。」そういつて、また、小倉は田代のほうをふり向いた。「そういえば、おいどうした、いつかの金は？」

「まだあのまんまになっている。」

「早く返してやれ。——でないと、菱川、ことによるとあの男も死ぬかも知れねえ。」

「死ぬかも？ ——どうして？」

「半月ほどまえ、出さきで急に引っくり返り、そのまんまずっとうちに寝ているそうだ。」

「どうして？ ——どうして、また……？」

「脳溢血だ。」

「脳溢……?」

九

田代はそういいかけたがすぐ「誰に聞いた、そんなこと?」

「先刻、吉沢に聞いた。」

「吉沢に? ——どうしてまた吉沢が……?」

「西巻に聞いて来たんだ。」

「どうして? ——どうして金平さんが? ——可笑しいじゃアないか、そんな……」

「ちツとも可笑しかアねえ、どこからかそれを聞くと一しよに西巻は見舞に行ったもんだ。」

「見舞に?」

「いくら犬と猿のような仲でもいざとなれば古い附合だ、三十年来の深馴染だ。……菱川のほうはどうでも、西巻にすれば、あゝいう男だ、矢ッ張どこか心細い気もするだろう。」

「みていねえ、チョコにもしものことがあれば誰よりもさき涙をこぼすのは金平だから……」

ふいとそばから三浦はいった。

間もなく三人は境内の寂しい木の間をもと来た道のつゞきへ出た。ぽつんと一けんだけそこに立った小さなペンキ塗の西洋館について曲るとそこはだら／＼と低くなった坂だった。——片側は高い石垣の、日のさ／＼ない、暗い、ヒツソリした道のうえに冬の名残の落葉が小砂利まじりに堆うずたかかった。

「しかし、それ……」しばらくしてまた田代はいった。「脳溢血かしら、ほんとうに？」

「どうして？」

「矢つ張、それ、いくらか若宮君のことを神経に……とでもいうんじやアないかしら、それ？」

「ビックリして眼をまわしたか？」三浦はすぐ茶化して「『夏小袖』の灰吹やじやアあるめえし……」

「いゝえ。……いゝえ、そうじやアなしに。——チョコにしたら随分寝ざめがわるからうじやアないか。」

「そんな男じゃアねえ。」

膠にべもなく小倉もいった。

「いゝえ、そんな男じゃアなくつても……」

「かつぐとしたら楽天坊主だ。」三浦は引取つて「吾妻に死なれ、若宮に死なれ、これで
またもしチョコに死なれたらいかに料簡ふての太え奴でも……料簡の太え奴は太えだけそれだ
けどツかに脆いところがある。——いゝ加減氣を腐らすだろう。」

「それに懲りて身にすぎた望みを起さなくなればそのほうが天下のためだ。」

「ふざけちゃアいけねえ。……一度や二度へたばつたつてそのまんま音無しくへたばり切
る相手じゃアねえ。——一度みこんだら決してあきらめるこつちやアねえ。」

「そんなにも、けど……?」

「芸妓でも、女優でも、あいつにこうとみこまれたら助かりっこねえ。——いくら逃げて
もキツとものにされる。——そのまた逃げるのを無理から追ッかけてしめるのがあいつの
味憎なんだ。」

「押しの強い奴にはかなわねえのよ。」小倉はいった。

「出来りやアいゝんだ、話さえつきやアいゝんだ。」三浦はそれをうけて「たゞそれだけ

……たゞそれだけだ。……恥も外聞もあるもんじやアねえんだ。」

「そうかなア。」

感心したように田代はいった。

……その坂は尽きた。が、それよりも、もっと広い、埃っぽい傾斜がすぐまた三人のまえに展けた。——それを上りつめたとき、三人は、省線電車の間断なく馳せちがう音響ひびきを脚下に、田端へつゞく道灌山の、草の枯れた崖のうえに立った。——み渡すかぎりの、三河島から尾久へかけての渺茫びようぼうとうちつゞいた屋根々々の海。——その中に帆柱のように林立する煙突の「新しい東京」の進展を物語るいさましい光景けしき……「変ったなア。」と歎息するように三浦はいった。「知るめえ、お前めえなんぞ。——ついこないだまで、こゝいら、ずつと荒川のふちまで一めんのもう田圃ひとみだったんだ。」

「一めんのねえ。」遠く田代も眸ひとみを放った。

「三月から四月にかけての菜の花のさかりのころなんぞつたらなかったもんだ。」

「菜の花のねえ。」

その光景のうえにひろがった大空。——水のように晴れたその大空に影を曳いた夕焼雲。……小倉はそれをみて無言だった。——淋しさやうかびて遠き春の雲、そうした句をしず

かにかれはおもい案じていた。

……田端から電車に乗って上野で下りた三人はそこでまた浅草まで地下鉄道に乗った。
——三人はいつかの向島のかえりのようにまた「菊の家」へとこゝろざしたのである。

（「大阪朝日新聞」一九二八年一月五日～四月四日）

青空文庫情報

底本：「春泥・三の西」講談社文芸文庫、講談社

2002（平成14）年8月10日第1刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集 第二巻」中央公論社

1968（昭和43）年4月25日

初出：「大阪朝日新聞」

1928（昭和3）年1月5日～4月4日

入力：kompass

校正：門田裕志

2014年1月1日作成

2014年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春泥

久保田万太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>